

**大山隠岐国立公園大山蒜山地域
利用の高付加価値化に向けた基本構想**

令和 7 年 3 月

環境省中国四国地方環境事務所

大山隠岐国立公園大山蒜山地域 利用の高付加価値に向けた基本構想

目 次

1 序論	p. 1
(1) 策定の目的・背景	p. 1
(2) 基本構想とは	p. 3
(3) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想の位置付け	p. 4
(4) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想の構成	p. 5
2 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の現状整理	p. 6
(1) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の概要	p. 6
(2) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の強みと課題	p. 14
3 大山蒜山地域 利用の高付加価値化の方向性	p. 37
(1) 大山蒜山地域のストーリー	p. 38
(2) 感動体験の方向性	p. 41
(3) 大山蒜山地域版インタープリテーション全体計画の方向性	p. 43
4 大山蒜山地域における利用拠点	p. 45
(1) 利用拠点とは	p. 45
(2) 利用拠点選定の考え方	p. 45
(3) 大山蒜山地域における利用拠点について	p. 46
(4) 利用拠点である大山寺地区の拠点整備の目標像	p. 48
5 事業化に向けた推進体制とロードマップ	p. 50
(1) 大山蒜山地域における推進体制のあり方	p. 50
(2) 今後の展開に向けたロードマップ	p. 52
(3) 今後の具体的な展開イメージ	p. 53

資料編

- (1) 関連計画の概要
- (2) 基本構想策定の経緯
- (3) 民間事業者との対話（サウンディング調査）

1 序論

(1) 策定の目的・背景

1) 国立公園満喫プロジェクトの展開

政府が平成 28 年に取りまとめた「明日の日本を支える観光ビジョン」（平成 28 年 3 月、明日の日本を支える観光ビジョン構想会議）に基づき、環境省は国立公園のブランド力を高め、上質なツーリズムを実現し、保護と利用の好循環により地域活性化を図ることを目指し、国立公園満喫プロジェクト（以下「満喫プロジェクト」という。）を推進してきました。

大山隠岐国立公園は、満喫プロジェクトの取組を先行的・集中的に実施する国立公園の一つに選定され、地域内の関係者及び行政機関により構成される「大山隠岐国立公園満喫プロジェクト地域協議会」では、取組の具体的な方針等に係る計画として、平成 28 年 12 月に「大山隠岐国立公園ステップアッププログラム 2020」を、さらに令和 3 年 2 月には後継計画となる「大山隠岐国立公園ステップアッププログラム 2025」（以下「SUP2025」という。）を、それぞれ策定し実施してきました。

2) 国立公園の利用の高付加価値化に向けた取組

令和 5 年 3 月に閣議決定された「観光立国推進基本計画」においても、引き続き国立公園の魅力向上とブランド化が謳われています。インバウンドが急速に回復する中で、観光立国推進基本計画も踏まえ、改めて満喫プロジェクトの指針を実現するための取組の一つとして、国立公園における利用の高付加価値化に向けた方向性の検討が行われてきました。

令和 5 年 6 月には「宿泊事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上に向けた取組方針」（以下「取組方針」という。）が公表され、それぞれの国立公園における自然・文化・歴史資源の状況や利用特性等を踏まえ、面的な魅力向上に取り組むにあたっての方向性を「利用の高付加価値化に向けた基本構想」（以下「基本構想」という。）として整理する具体的な手順が示されました。

3) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想の検討

令和 5 年 8 月、国立公園における滞在体験の魅力向上のための先端モデル事業（以下「先端モデル事業」という。）の対象として、十和田八幡平国立公園十和田湖地域、中部山岳国立公園南部地域、大山隠岐国立公園大山蒜山地域、やんばる国立公園の 4 公園が選定されました。

大山隠岐国立公園大山蒜山地域の選定のポイントは「日本の伝統的自然観や歴史文化を踏まえた自然体験の拠点づくり」とされています。

前述の大山隠岐国立公園での満喫プロジェクトの実施により、大山蒜山地域において、公共施設では、多言語化、ICT 等を活用した内容の充実、トイレ洋式化、バリアフリー化を伴う形で整備・改修が進み、民間施設でも、廃屋や空き店舗等を撤去・改修し収益性のある施設への転換が図られました。また、官民連携で、体験型プログラム・ツアー商品の

開発や、大山入山協力金の導入による保護と利用の好循環の仕組みづくり等が進展しました。他方、令和元年度のアンケート調査（大山隠岐国立公園全体）では、満喫プロジェクトを先行的・集中的に実施してきた最初の8国立公園の中では、日本人・外国人ともに満足度やリピーター率がやや低く、またアクティビティ費の支出が少ない傾向が見られました。このため、滞在全体としての満足度やリピーター率の向上に向け、多角的な受入環境の整備や質の高いユニークな体験ツアーの提供等に取り組み、「ならでは」の独自色の打ち出しを検討する必要があります。

先端モデル事業の対象として選定後、令和5年11月より関係自治体、団体、事業者等のヒアリングや文献調査のほか、民間提案公募や会議体での議論等に取り組んできました。

本基本構想では、これまでの検討を踏まえ、利用拠点の魅力向上に取り組むための方針を示します。

(2) 基本構想とは

取組方針では、国立公園における利用の高付加価値化を以下のように定義しています。

国立公園における利用の高付加価値化とは、単に富裕層を対象として高額で豪華な宿泊施設やサービスを提供することを意味するものではない。

国立公園の利用の高付加価値化とは、次の①及び②を付加価値として高めることを意味するものと定義する。

- ① 国立公園だからこそ守られてきた魅力的な自然環境を基盤として、その土地の生活・文化・歴史を踏まえた国立公園ならではの本物の価値に基づく感動や学びの体験を提供することで、利用者に自己の内面の変化（トランスフォーメーション）を起こすことを目指す。
- ② サステナビリティ及びレスポンシビリティの観点で、保護と利用の好循環の実現を目指す。

以上を踏まえ、大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想では、大山蒜山地域ならではの魅力的な自然環境の背景にある生活・文化・歴史などの現状の整理を元に、共通のストーリー、感動体験の方向性や、地域ならではの本物の価値を利用者に対して適切に伝達するために必要なインタープリテーションの要素を検討することで、大山蒜山地域ならではの本物の価値を伝え、保護と利用の好循環を実現することを目指します。

その上で、利用拠点における拠点整備の目標像や、拠点を中心とした地域全体の推進体制や高付加価値化のロードマップを検討し、計画のさらなる具体化を掲げます。

(3) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想の位置付け

大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想は、「明日の日本を支える観光ビジョン」、「SUP2025」、「取組方針」に準拠し、大山隠岐国立公園大山蒜山地域における利用の高付加価値化の方向性を示すものです。

また、大山隠岐国立公園大山蒜山地域に関係する自治体等の関連計画とも整合・連携を図ります。主要な計画の概要は資料編(1)関連計画の概要に掲載します。

さらに、大山隠岐国立公園を含む鳥取・島根エリアは「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくりに向けたアクションプラン」（令和4年5月、観光庁）に基づき、総合的な施策を集中的に講じる「モデル観光地」に認定されており、必要な連携を検討していきます。

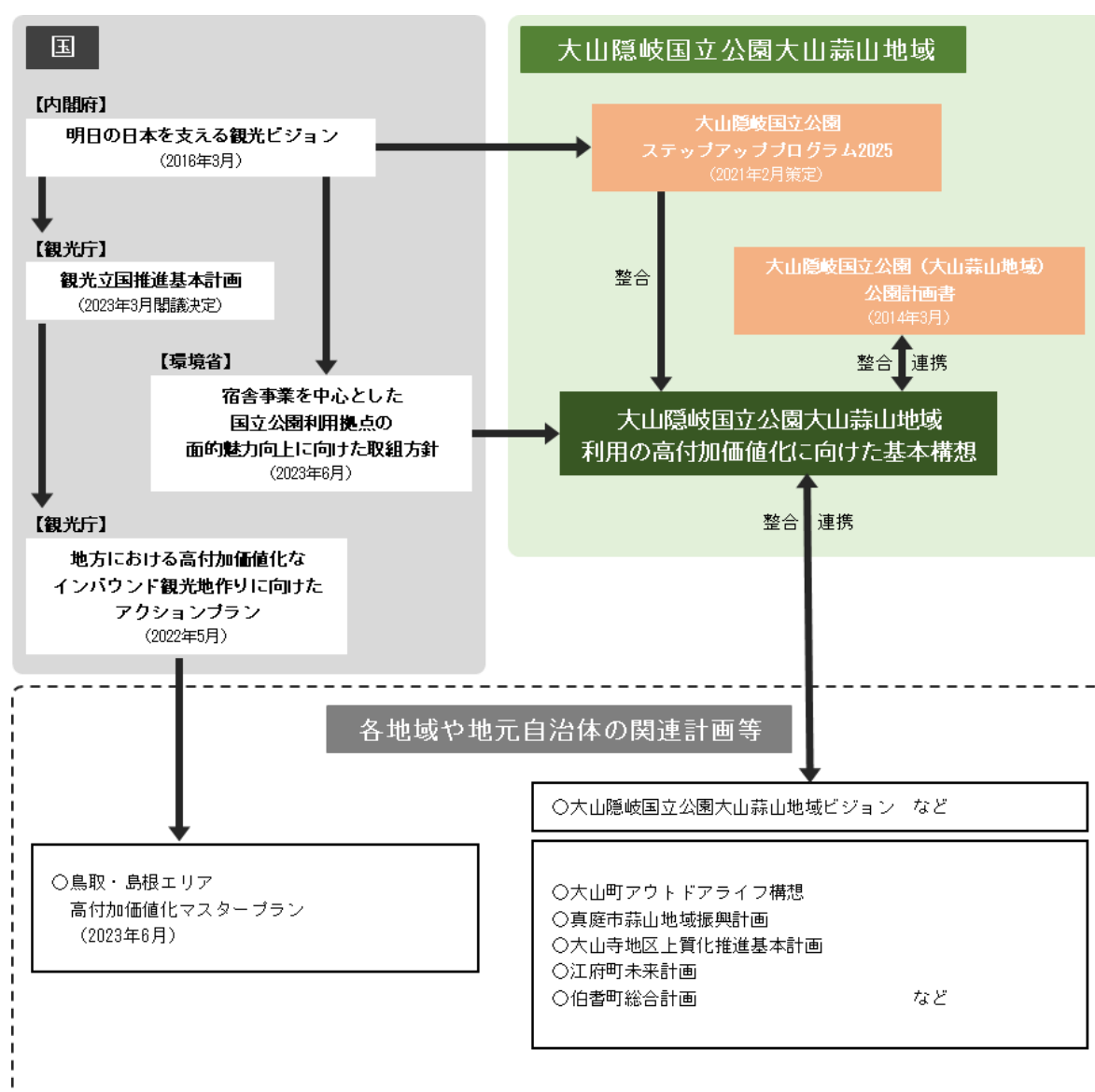


図 大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想の位置付け

(4) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域における基本構想の構成

本基本構想は以下の構成としています。

第 2 章では、大山隠岐国立公園大山蒜山地域の概要、地域の強みと課題を整理します。

第 3 章では、それらを踏まえ、大山蒜山地域の目指す姿を掲げ、目指す姿の実現に向けて大山蒜山地域全体のストーリー、感動体験の方向性、インタープリテーション全体計画の方向性について整理します。

第 4 章では、大山蒜山地域の目指す姿の実現に向けて、国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設を中心とした面的な魅力向上の場となることが想定されるエリアとして利用拠点についての検討過程を記載した上で、利用拠点における拠点整備の目標像について整理します。

最後に、第 5 章では、利用の高付加価値化に向けた取組を継続的に推進するために求められる対応として、推進体制の枠組みや今後のロードマップ等について整理します。

2 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の現状整理

第 2 章では、大山隠岐国立公園大山蒜山地域の概要、地域の強みと課題を整理します。
なお、各項目の内容の検討過程は、資料編(2)基本構想策定の経緯に記載します。

(1) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の概要

1) 大山隠岐国立公園の概要

昭和 11 年 2 月に、日本を代表する火山景観として大山の一角が大山国立公園に指定され、その後、昭和 38 年 4 月に大山と同様の火山形態である蒜山及び三瓶山の区域と、大山から眺望することができ、一体性を有する隠岐諸島及び島根半島の海岸景観を有する区域を拡張し、大山隠岐国立公園が誕生しました。その後、平成 14 年 3 月には大山及び蒜山に隣接してブナ林等の優れた景観を有する毛無山及び宝仏山一帯を、平成 26 年 3 月には大山、蒜山、三瓶山と同様の火山による地形的特徴と自然林の垂直分布等の希少性の高さを有する三徳山地域を編入し、現在の大山隠岐国立公園を形成しています。

中国地方の最高峰である大山のほか、蒜山、船上山、毛無山、三瓶山等の山地部は、火山地形、森林、草原等で構成され、それぞれの環境に適応した多様な動植物が見られます。中でも大山は歴史上最古の神山として知られ、三徳山は山岳修行の聖地とされています。

隠岐諸島や島根半島地域の海岸・島嶼部では、火山活動・地殻変動・気候変動・沖積作用・浸食作用等の要因の組合せにより形成された多彩な海岸景観が見られます。とりわけ隠岐諸島は、その地質学的な成り立ちや、独自の生態系、受け継がれてきた人の営みが評価され、ユネスコ世界ジオパークに認定されています。

また、島根半島地域は、日本ジオパーク「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」として認定されており、島根半島地域には、出雲大社をはじめとする神話にまつわる名所旧跡が点在し、伝統的な神事や祭が今もなお数多く執り行われているなど、神話や山岳信仰とともに受け継がれてきた暮らしが、山と島と海の自然風景の中に溶け込んでいます。

大山隠岐国立公園は、このように、自然と文化が融合した多彩な景観を楽しむ点が特徴となっています。これを反映して、登山、ハイキング、スキー、遊覧船からの海岸景観の鑑賞、海水浴、シーカヤック、ダイビング、キャンプ、サイクリング等の山や海での四季折々のアクティビティとともに、寺社参詣や神楽の鑑賞等の文化・歴史に触れる体験とを組み合わせた多様な利用がなされています。

＜大山隠岐国立公園の利用者の現状＞

大山隠岐国立公園の総利用者数は、平成 25 年の約 1,537 万人をピークに令和元年までは 1,200 万人を下回ることなく微減の傾向を示しています。令和 2～3 年は新型コロナウイルスの影響を受け 1,000 万人を下回りましたが、令和 4 年には 1,196 万人と回復の兆しが見えています。

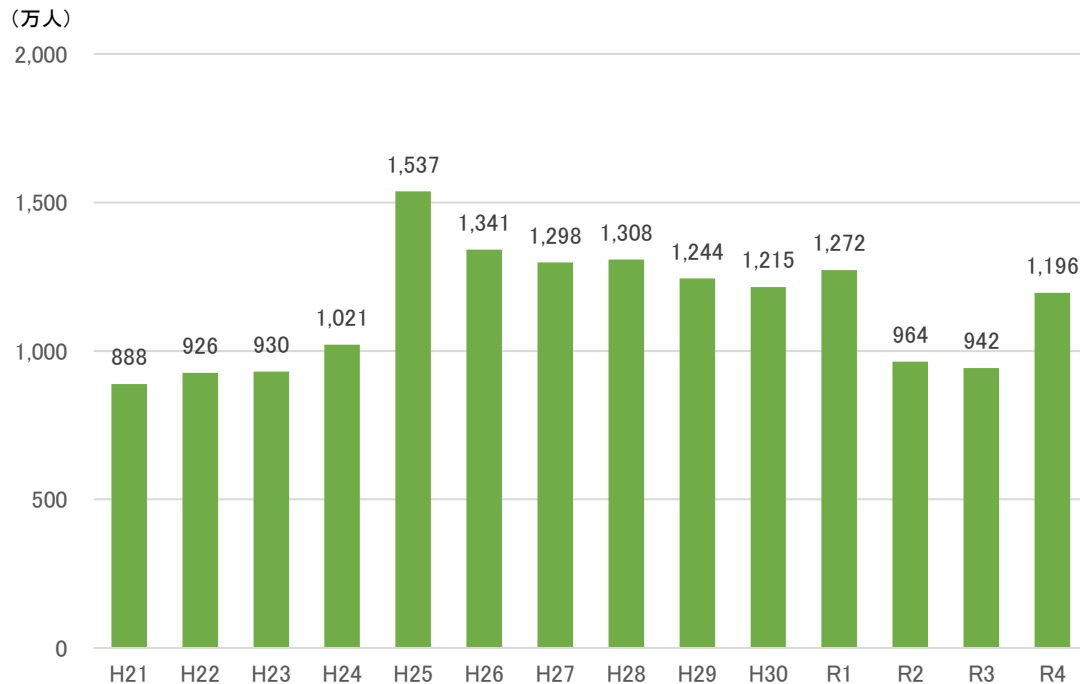


図 大山隠岐国立公園総利用者数の推移

[出典]環境省自然環境局「自然公園等利用者数(令和4年)」

2) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の概要/保護と利用の方針について

大山隠岐国立公園大山蒜山地域（以下「大山蒜山地域」という。）は、鳥取県西部の7市町（倉吉市、東伯郡三朝町、東伯郡琴浦町、西伯郡大山町、西伯郡伯耆町、日野郡日野町、日野郡江府町）及び岡山県北部の2市村（真庭市、真庭郡新庄村）に位置しています。以下に、地域の概要ならびに保護と利用の方針について記載します。

2)-1. 大山蒜山地域の概要

○地形・地理的特徴

- 中国山地を代表する名峰・大山と、蒜山高原が広域を形成
- 森林・河川・海岸などの多様な地形
- 様々なルートでアクセスしやすい高原リゾート

○生態系・景観の特徴

- 火山由来の地形がつくる山から海までの一体となった景観
- 極相林から草原まで多様な植生により形成される自然環境
- 多様な植生ゆえに育まれる地域独自の生物多様性

○文化・歴史・地域性

- 大山、三徳山や船上山など山岳信仰・修験道の拠点として栄えてきた歴史
- 山々や河川などの自然環境を利活用しながら生活を営んできた地域性
- 一木一石運動、山焼きや茅刈り等といった利用者参加型の自然環境保全の取組

大山蒜山地域は大山山麓一円、及び岡山県側の蒜山高原から毛無山に至る一帯、三徳山を含む地域を対象とし、大山蒜山地域内の大山、蒜山、三徳山は、鐘状の形態をもつ火山連峰の風景形式とされ、地形の観点から一体的な特徴を有するほか、大山信仰に代表される歴史・文化的背景についても共通項を持っています。

植生の観点からは、大山の山頂付近には国指定特別天然記念物に指定されている国内最大のダイセンキャラボク群落が分布するとともに、固有種のダイセンアシボソスゲをはじめとする高山植物が多く生育しており、中腹には西日本最大規模のブナ林が広がっています。蒜山はなだらかな山容を有しており、その麓には山焼きなどの里山管理により維持されている半自然草原が広がります。毛無山にはまとまった面積のブナ林が残っており、三徳山では照葉樹林から落葉広葉樹林へと標高に沿って移行する植生の垂直分布が見られます。

複数の植生を基盤として多様な動物相が成立しており、鳥類ではオオルリ、イヌワシやクマタカ、ブッポウソウ等、両生類ではオオサンショウウオ等、昆虫類ではフサヒゲルリカミキリやゴマシジミ等の絶滅危惧種を含む多くの種が生息しています。

また大山、蒜山、三徳山には豊富な文化資源が分布しており、これらは大山信仰に代表される共通の歴史・文化的背景を有します。大山及び三徳山は開山 1300 年以上の歴史をもち、それぞれ日本遺産に「地藏信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市」及び「六根清浄と六感治癒の地～日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉～」として認定を受けています。また、国宝である三徳山の投入堂や、国指定重要文化財である大神山神社奥宮、大山寺阿弥陀堂、三佛寺文殊堂や、国指定史跡である船上山行宮跡など、多数の文化財が現存しています。

これらの自然・文化・歴史資源については、大山や桝水高原、船上山、大山滝、蒜山三座等での登山・ハイキングや自然探勝、大神山神社や三徳山三佛寺等の寺社参詣、大山寺や奥大山・鏡ヶ成、蒜山高原でのキャンプ、スキー、サイクリングなど、四季を通じた多様な利用がなされています。『大山隠岐国立公園（大山蒜山地域）公園計画書』では、同地域において登山、自然風景探勝、社寺参詣、キャンプ、ピクニック、スキー、エコツアー等が中心となってきたことを踏まえ、「自然・歴史・文化を感じることができる、地域内での一体的かつ相互に関連性のある利用」を進めることとされています。

とりわけ中国地方の最高峰であり、かつ独立峰である大山には、年間 6 万人前後の登山客が国内外から来訪します。その山頂周辺からは、日本海と隠岐諸島、蒜山三座や三瓶山、中国山地の山々までも見渡す 360 度の眺望を楽しむことができます。

また、地元の食材や乳製品を活かした食文化体験が可能で、ガストロノミーツーリズムの拠点としても機能しています。

こうした貴重な自然と文化を未来へ継承するため、地域では持続的な資源活用を利用者と一緒により上げる取組が多く見られ、大山の自然環境を守るために実施されてきた「一木一石運動」、蒜山の山焼きや茅刈りなどがその一例です。これらの取組は、地域の森林や山麓の保全を目的に、地域住民や登山者、行政が協力して植樹や登山道整備、半自然草原の利活用などの活動が続け、参加者一人ひとりが“地域を守り伝える”という意識をもちながら地域の自然を支えていく取組です。ボランティアの受け入れや寄付金の募集等を通じて、登山道や周辺環境の維持・回復が図られており、利用者自身が自然環境の保全に関わる仕組みとして機能しています。

このように、山から高原、そして海へと連なる多様な景観と、極相林から開放的な草原にいたるまで幅広く展開する植生こそが大山蒜山地域最大の魅力であり、その豊かな自然と歴史・文化を末永く保ち続けるため、利用者と地域が連携した継続的な取組がなされています。

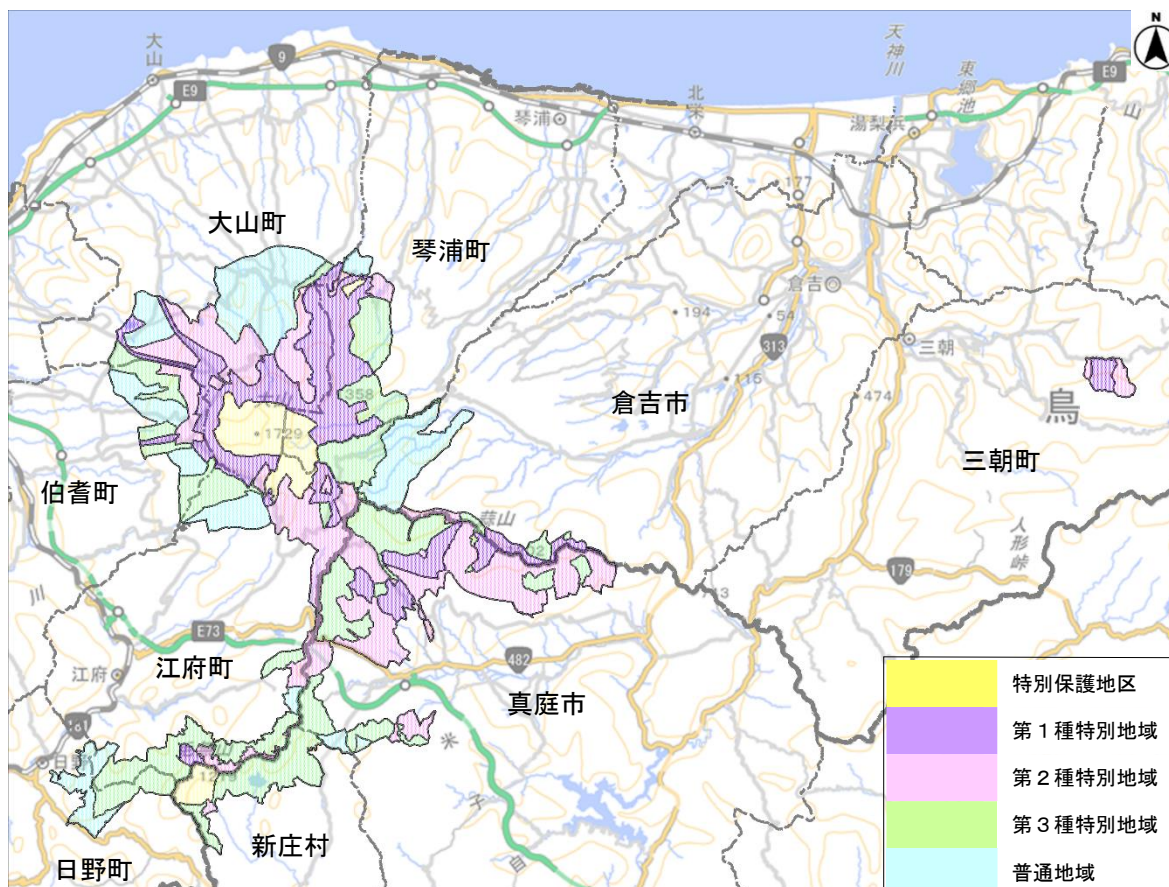


図 大山隠岐国立公園 大山蒜山地域



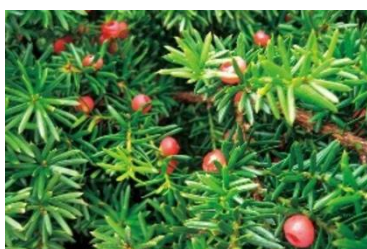
大山の北壁



蒜山三座



三徳山 投入堂



ダイセンキヤラボク



オオルリ



オオサンショウウオ

2)-2. 大山蒜山地域の保護と利用の方針

先端モデル事業における「大山蒜山地域」は、大山隠岐国立公園の管理計画区としての大山蒜山地域をいいます。

大山蒜山地域に関係する、国立公園の管理運営に係る計画は下表のとおりです。これらの計画では、大山蒜山地域における保護と利用の方針が示されています。

計画の名称	概要	策定年月（最新）
大山隠岐国立公園（大山蒜山地域）公園計画書	管理運営の基本方針、規制計画、事業計画を定めたもの	2014 年（平成 26 年）3 月
大山隠岐国立公園 大山蒜山地域管理計画書	規制計画と事業計画で定められた対象や事業、公園内での行為などについて、それぞれの保全や利用の方針、取扱の方法等を定めたもの	2005 年（平成 17 年）1 月
大山隠岐国立公園（大山蒜山地域）区域及び公園計画図	大山蒜山地域の区域、および規制計画と事業計画の範囲・位置を示したもの	2014 年（平成 26 年）3 月

保護の方針のうち特に本基本構想に関わる事項は、保護規制計画です。保護規制計画は規制計画の一部であり、国立公園の開発や過剰な利用の回避を目的としています。同計画により、公園内での建物の新築や増改築、道路の敷設、土地の形状変更といった特定の行為が規制され、実施にあたっては事前の許可や届出が求められます。

規制の強さは、地形や資源の分布などの条件に応じて設定された、保護地区や地域（保護のゾーニング）によって異なります。規制の内容、及び大山蒜山地域における保護のゾーニングの範囲は、『大山隠岐国立公園（大山蒜山地域）区域及び公園計画図』に掲載されています。

利用の方針のうち特に本基本構想に関わる事項は、利用施設計画です。利用施設計画は事業計画の一部であり、国立公園の適正な利用のために必要な休憩所・野営場・道路等の施設や、集団施設地区等に関する計画が記載されています。

集団施設地区は、複数の施設を総合的に整備する地区として位置付けられるエリアであり、大山蒜山地域においては大山寺地区、鏡ヶ成地区、榎水高原地区、蒜山地区の4地区が指定されています。各集団施設地区の特徴や整備の計画目標について以下に抜粋します。また、大山蒜山地域内の4地区のおおよその位置は、p.13 掲載図のとおりです。

＜大山寺地区＞

本地区は、大山の北西側の中腹、ブナの自然林等に囲まれた標高約 800mの傾斜地に位置し、古くから地蔵信仰・牛馬市で栄えた門前町で、旅館や宿坊が数多くある。米子大山線道路（車道）等により、米子、松江方面へ通じ、西日本最大のスキー場としても広く知られている。この恵まれた自然・文化環境や良好なアクセスを活かし、自然探勝及び屋外レクリエーションの拠点となるよう施設を計画するものとする。

＜鏡ヶ成地区＞

本地区は、御机笹ヶ平線道路（車道）及び蒜山鏡ヶ成線道路（車道）沿線で、烏ヶ山南東部の標高約 900m付近に位置し、周囲には良好なブナ林が広がる。一方、地区の中心部は草原景観を呈し、貴重な高層湿原も見られる。この恵まれた自然環境や良好なアクセスを活かし、登山、自然探勝、野営等のレクリエーションの拠点となるよう施設を計画するものとする。

＜榑水高原地区＞

本地区は、溝口大山線道路（車道）沿線に位置し、大山の西側中腹に広がる標高 700～800mの高原で、眼前には美しいスロープを描く大山の秀麗な山容が見られる。眼下には日本海に伸びる湾曲した弓ヶ浜半島や中海に横たわる島根半島が望まれ、日没には宍道湖の彼方に沈む夕日が美しい。この恵まれた自然環境や良好なアクセスを活かして、自然探勝、スキーなどの利用者のためのレクリエーションの拠点となるよう施設を計画するものとする。

＜蒜山地区＞

本地区は蒜山鏡ヶ成線道路（車道）沿線で、蒜山高原西部の標高約 500～600mの南に向かう傾斜地に位置し、周辺に牧場や畑が広がる牧野的な雰囲気のある場所である。この恵まれた自然環境や良好なアクセスを活かし、国民休暇村として登山、自然探勝、野営などのレクリエーションの拠点となるよう施設を計画するものとする。

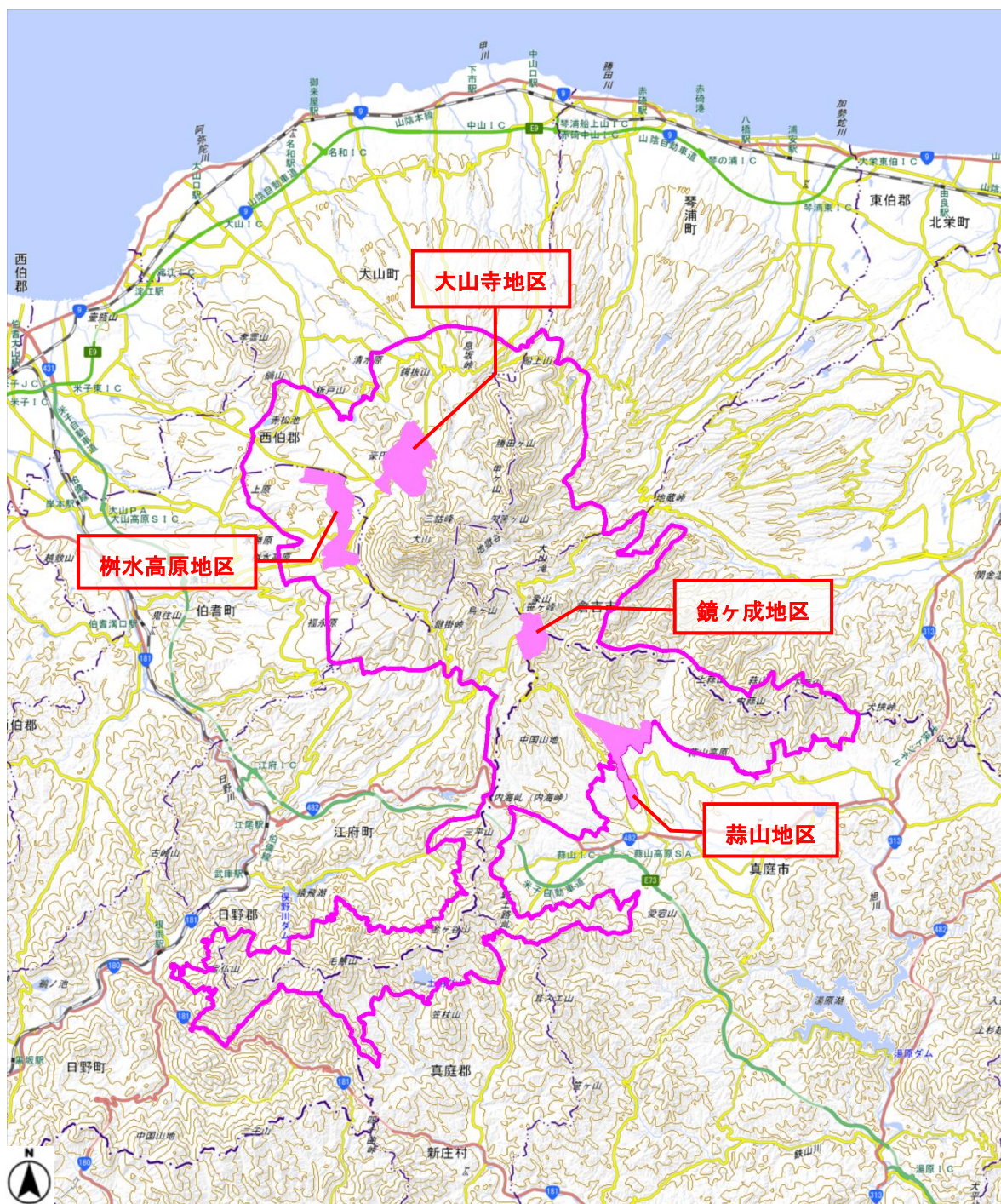


図 大山隠岐国立公園大山蒜山地域 集団施設地区位置図

(2) 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の強みと課題

大山隠岐国立公園大山蒜山地域において利用の高付加価値化を目指すにあたって、地域における強みと今後解決すべき課題を分析します。本項目では、特に利用拠点となりうる4つの集団施設地区並びにその他エリアの強みと課題について、ヒアリングなどで挙げられた意見を基に調査検討した内容について整理します。また、それらを踏まえ、大山蒜山地域全体の強みと、解消していくべき課題について掲げます。

1) 集団施設地区の強みと課題

1)-1 大山寺地区（大山町）の強みと課題

S(Strength | 強み)

大山信仰の歴史によって守られてきた文化・自然環境や、
その恵みとしての食文化・水などの豊富な資源

＜ポイント＞

- ①信仰文化により保護され、形成された豊かな自然環境
- ②滞在を伴う特徴的な歴史・文化体験
- ③自然・歴史・文化によって育まれた大山ならではの食文化や水

①信仰文化により保護され、形成された豊かな自然環境

大山寺地区は、大山山頂の池から現れたとされる地蔵菩薩を祀る大山寺が隣接しており、大山信仰の中心地として栄えました。平成30年に開山1300年を迎えるなど歴史は長く、大山信仰が広く地域に根付いていたことで、明治20年代まで一部を除き入山が禁じられ、その後も雑木の除伐が進む中で大山の木は守られてくるなど、その自然環境が保護されてきました。他の地域では不要と考えられ、切り倒されていたブナが信仰によりひとつの命として大切に守られてきたことで、今では地域に西日本最大級の壮大なブナの原生林が残っています。信仰の歴史を通して守られてきた大山寺地区の手つかずの自然は、山岳信仰を象徴する寺社仏閣や地蔵などの様々な史跡と相まって神秘的な風景を創り出します。

また、大山寺地区からは日本海を臨むことができ、特に天候が良い日には島根半島、弓ヶ浜半島、隠岐諸島を一望することができます。山から海まで、地域の自然を一体で体感することができ、大山のブナ林に蓄えられた水が川を流れて海を作るといった自然の流れが感じられる風致を持っています。

これら豊かな自然を有するゆえに、地域では登山、ハイキング、スノーシュー、スキー、キャンプ、サイクリングなど、四季を通じて様々なアウトドアコンテンツを提供しており、地域への誘客を促す要因の一つとなっています。夜には美しい星空を鑑賞することができ、星空観察のツアーなども提供されています。



大山寺



大山登山



たいまつ行列

②滞在を伴う特徴的な歴史・文化体験

大山寺地区は、大山の信仰文化の歴史を象徴するスポットや体験が豊富にあり、訪れる人々が大山の歴史文化に触れることができます。特に、長時間滞在をして地域を周遊することで、大山の信仰文化をより深く感じることができます。

地域のランドマークである大山寺は、かつて修験道の修行道場として栄えた歴史を持ち、また、大神山神社は、修験者のための簡単な遥拝所として始まったという歴史があります。さらに、大山寺と大神山神社奥宮以外にも、旧僧坊や阿弥陀堂などの施設・文化財が徒歩圏内に点在しており、一帯は静かな雰囲気が保たれています。

大山寺地区では、地域一帯にあるこれら歴史的・文化的資源を一つのストーリーのもとに結び付けて発信し、訪問者に資源の背景にある歴史文化を伝えるための取組が進められています。その具体例として、平成 28 年には、日本遺産「地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市」の認定に際して、周辺の歴史文化資源や、それらをつなぐストーリーが整理され、積極的な情報提供がなされています。地域の歴史文化のストーリーを聞きながら寺社仏閣や文化財を巡るガイドツアーも提供されています。

さらに、滞在を伴う宿坊体験では、大山寺に近接する立地で、精進料理や僧侶が行う座禅体験などの真正性をともなった一連の体験が提供されており、高い価値を有しています。また、宿坊が自然の中に溶け込んでおり、信仰文化のみならず、歴史が育んだ唯一無二の自然環境も体感することができます。特に、森の中に開かれたお堂での座禅体験では、森と一体化しているような感覚を感じることができると言われており、歴史文化と、国立公園ならではの自然が融合した唯一無二の体験をすることができます。



大神山神社



宿坊



座禅体験

③自然・歴史・文化によって育まれた大山ならではの食文化や水

大山の自然環境は信仰文化によって守られてきた歴史があり、中でも保水性が高いブナは、ミネラル豊富な水を育む命の循環装置となり、農・畜産物を育て、さらに日本海に注ぎ込み、豊かな海産物の生息・生育に最適な環境をもたらしています。地域の歴史と自然環境の恩恵を受けた様々な食材は、大山寺地区はじめ大山山麓の人々の食文化を形づくり、今もその食文化が地域に継承されています。

例えば、大山寺が修験の霊場として栄えていた時代、地域では清らかな水資源を活用し、精進料理に活用する豆腐が盛んに生産されていました。この伝統的な食文化を継承しようと、大山寺参道沿いには豆腐の販売を行う店舗が存在しています。また、大山の山岳信仰から派生した牛馬信仰により開かれた「牛馬市」は、大山おこわや大山そばなどの伝統的な食材を生み出しました。水の恵みを受けた山鳥や山菜を使って作られていたこれらの郷土料理は、少しずつ形を変えながら、今もなお地域の伝統として受け継がれています。

他にも、大山で育つ野菜やジビエ、和牛、さらには海産物まで、地域の人々は様々な食材を大山の恵みと捉えています。訪れる方々もまた、この魅力的な食べ物と美味しい水を存分に楽しみ、大山固有の自然、歴史、文化について、食を通して体感することができます。



大山おこわ



大山そば

W(Weakness | 課題)

地域の魅力を存分に感じられる宿泊施設や観光客の周遊につながるコンテンツが少なく、廃屋等もあるため滞在時間が短い

<ポイント>

- ①地域の魅力を体現した宿泊施設が不足しており、宿泊につながらない
- ②訪問者の周遊につながるコンテンツが少なく、景観を妨げる施設等が散見される
- ③スキーシーズンなどの季節偏重

①地域の魅力を体現した宿泊施設が不足しており、宿泊につながらない

5月～10月あたりの時期には登山客が安定的に来ているものの、日帰り登山を選ぶ人が多く宿泊につながっていない現状があります。

また、合宿や団体旅行向けに大部屋や共同トイレの設計となっている宿泊施設が多い一方で、近年のニーズは多様化しており、プライベートな空間を重視される方や個人旅行のニーズに対応可能となる宿泊施設を求められる傾向が強まっています。かつ、大山信仰の歴史によって守られてきた文化・自然環境を体験でき、その恵みである食材を使った食事や日本遺産にもなっている郷土料理の提供など、地域ならではの魅力を持った宿泊施設が少なく、他地域との差別化ができていないことから宿泊する特別な理由が見出せず、宿泊客が周辺地域（米子、皆生、玉造など）へと流れてしまっている現状にあります。

②訪問者の周遊につながるコンテンツが少なく、景観を妨げる施設等が散見される

大山寺エリアにおいては、大山寺や大神山神社含む寺社を巡るガイドツアー等存在するものの、まち歩きをしながら楽しむ要素が限られており、訪問者が立ち寄れる飲食店・物販店の種類が少ないことから、地域の周遊をしながらの楽しみ方が少ない状況です。

さらに、ナイトタイムのコンテンツも少なく日中に訪れるだけで終わってしまい、訪問者の滞在時間の延伸につながらない要因も一つとなっています。

また、後継者不足や家族経営の宿泊施設が多いことから、個々の宿泊施設の設備拡充や飲食等の整備を行うことが難しく休業・廃業になってしまった宿泊施設や、経年劣化のみられる文化財などがエリア内に点在していることから、周遊をする際に目に入り魅力が薄れ、地域の景観を妨げるものも存在します。そのほか、地域資源となっている登山道整備や自然環境保全に関して使える財源が不足している現状にあります。

③スキーシーズンなどの季節偏重

昭和 20 年代ごろからスノーリゾートとして発展してきた経緯もあり、スキーシーズンの訪問者をターゲットにした誘客が主流になっており、春から秋にかけてグリーンシーズンの宿泊客が少なく、偏重が見られる現状にあります。そのため、スキーシーズンに依存しない年間を通じた訪問者の増加による地域経済の安定化と活性化実現のため、特にグリーンシーズンの宿泊客の誘客に課題があります。

1)-2 鏡ヶ成地区（江府町）の強みと課題

S(Strength | 強み)

奥大山の豊かな自然環境からの恵みである「水」を守り、
受け継いでいくための産学官を巻き込んだ体制や取組

<ポイント>

- ①奥大山の豊かな自然の恵みとしての「水」
- ②自然環境保全に対する産学官一体での取組
- ③保全の取組の環境教育への展開

①奥大山の豊かな自然の恵みとしての「水」

日本海側から見て大山北壁の奥側にある江府町は「奥大山」とも呼ばれ、雄大な自然とともに見ることができる鍵掛峠からの大山の景観をはじめ、豊かなブナ林や美しい溪流である木谷沢溪流があり、大山との一体的なつながりや大山からの「水」の恵みを感じながら森林浴を楽しむことができます。

また、湧水量が多く、飲料メーカーの採水地でもあり水に関わる事業者も多いため、地域では特産品として扱われるほど、重要な資源として認識されています。



鍵掛峠からの大山南壁



木谷沢溪流

②自然環境保全に対する産学官一体での取組

地域にとって重要な「水」やその背景にある自然環境を守り、受け継いでいくために、江府町では様々な自然保全の取組が推進されています。

地域における重要な拠点である鏡ヶ成においては、良好なブナ林や中心部の草原景観、貴重な湿原などの恵まれた自然環境を守るべく、産学官が連携した鏡ヶ成保全再生活用協議会が発足し、春の山焼き、初夏の選択的草刈りや秋の防火帯作りなどをボランティアの協力も得ながら行っています。また、観光客が多い木谷沢溪流においては、自然環境に配慮して、コンクリートではなく石を活用して階段を整備するなど、利用を前提とした保全の取組がなされています。



鏡ヶ成地区における豊かな自然と保全活動

③保全の取組の環境教育への展開

地域の方々にとって重要な「水」やその背景にある自然環境を受け継いでいくための取組は地域における知識やノウハウとして蓄えられ、環境教育としても活かされており、木谷沢溪流では水の大切さなどを伝えるプログラムがあるなど、地域独自の重要な自然環境を活用して学びの機会を提供しています。

環境について学べるまちにするべく発足した奥大山自然塾では地球環境を学び、未来の地球を考えるための環境教育プログラムを提供しています。令和5年には奥大山自然文化協議会が発足し、奥大山の自然を通じて幅広い世代の人々に向けて、豊かな感性を育む活動や体験の機会を提供するような取組の推進がなされています。



奥大山自然塾で学べる自然の奥深さ

W(Weakness | 課題)

地域ならではの自然体験活動の認知が不足しており、
通年稼働している宿泊施設も少なく通過型観光地になっている

＜ポイント＞

- ①地域ならではの自然体験活動の訪問者への認知不足
- ②通年稼働している宿泊施設が少ない
- ③通過型観光になっている

①地域ならではの自然体験活動の訪問者への認知不足

奥大山自然塾等の、奥大山の自然を通じた貴重な体験ができる機会を提供しているものの、地域の一体感やエリア全体の印象を想像できるような情報発信が不足しており、訪問者の認知につながらない状況があります。

②通年稼働している宿泊施設が少ない

江府町の特徴的な宿泊施設として、標高 920m に位置する休暇村奥大山があり、ブナ原生林からの恵みとしての天然水浴場や、豊かな自然環境からの食体験、大自然の中で希少な湿原植物や生物の多様性を感じることができます。

一方で、地域内で通年稼働している宿泊施設は少なく、閑散期は閉じているものもあります。

③通過型観光になっている

域内には、エバーランド奥大山、奥大山スキー場、休暇村奥大山、飲料メーカーの天然水工場、ブルーベリー農園など豊かな自然環境を活用した施設が数多く存在します。しかし、日帰り利用が大部分を占めているほか、これらの資源も観光客が年間を通して繰り返し訪れる魅力ある観光基盤として十分に活用されているとは言えない状況にあります。

1)-3 榑水高原地区（伯耆町）の強みと課題

S(Strength | 強み)

大山山麓の山・里山・海を一体となって体感できる風致と

地域で守られてきた豊かな水によって育まれる食体験

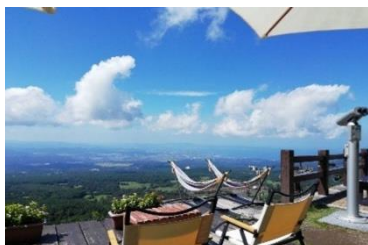
<ポイント>

- ①大山山麓の山・里山・海を一体となって体感できる風致
- ②地域で守られてきた豊かな水資源
- ③水資源によって育まれる食体験

①大山山麓の山・里山・海を一体となって体感できる風致

伯耆町は、大山や鳥取県の三大河川の一つである日野川など、雄大な自然景観に囲まれたうおいのある環境の中にあり、大山山麓の山から海までが一体となった風致を体感することができます。

榑水高原地区からは弓ヶ浜半島や島根半島を見渡すことができ、日本海に沈む美しい夕日を眺めることができます。また、多くの種類の鳥や昆虫が見られ、様々な花に引き寄せられて多くの蝶が集まることで有名です。また、トレッキング、冬のスキーやスノーシューなど様々なアクティビティが楽しめます。かつて大山寺に向う参詣者が利用した横手道では、道沿いに立ち並ぶ一町地蔵を見ながら、大山中腹のブナやミズナラの林の中の緩やかな道を散策することができます。



日本海を見渡す榑水高原



冬のアクティビティ



様々な植物や生物を育む環境

②地域で守られてきた豊かな水資源

伯耆町では、大山山麓の豊かなブナ林から育まれる水資源が豊富なため、飲料メーカーの採水地にもなっており、地域の人々も「水」を重要な資源としてとらえています。

豊かな水資源を育む自然環境を守るため、ブナの植林を中心とした保全活動や、硯ヶ池までの道の整備活動といった民間団体による様々な保全活動が行われています。



硯ヶ池



名水の里「地蔵滝の泉」

③水資源によって育まれる食体験

地域の人々によって守られてきた水資源は大山山麓を中心にした農業地帯に流れ込み、大山の火山灰土である黒ボク土とともに土壌を育み、多様な農畜産物が生産されています。白菜、大根、白ねぎ、しいたけやお米等の特産品の生産や食鶏、乳用牛、肉用牛の飼育などの農業が行われ、さらに特産品開発や観光と地場産品の流通の連携など、食を観光体験につなげる新たな発展にも取り組まれています。



大山の恵みとしての農畜産業

W(Weakness | 課題)

夜間の魅力あるコンテンツが少なく日帰り利用となっており

スキー客の減少もあり施設運営の課題も大きい

＜ポイント＞

- ①日帰り利用となっており宿泊につながらない
- ②スキー客離れに伴う観光客の減少
- ③施設を運営する人員不足や高齢化

①日帰り利用となっており宿泊につながらない

伯耆町には山・里山・海を一体となって体感できる風致があり、様々なアクティビティを体験することができる一方で、夜間の魅力あるコンテンツが少なく訪問客の滞在時間が短くなっています。

また、米子道のインターチェンジ（溝口インターチェンジ、大山高原スマートインターチェンジ）もあるため大山周辺観光の広域的な玄関口としての機能を有しており利便性もあるものの、近年の高速交通網の整備などにより京阪神・山陽方面からは日帰りの観光が中心となったことや、大山が松江・出雲への通過点になりつつあることなどにより宿泊につながらず日帰り利用となっています。

②スキー客離れに伴う観光客の減少

柵水高原地区においては、スキーをしながら日本海までを一望することができ、夕暮れや夜景なども楽しめる全国でも珍しい体験ができるものの、近年のスキー離れによる冬期の利用客数の減少が顕著となっています。

③施設を運営する人員不足や高齢化

柵水フィールドステーションやスキー場などのアクティビティ施設の人員不足や高齢化が進んでおり、運営面の課題があります。

1)-4 蒜山地区（真庭市）の強みと課題

S(Strength | 強み)

自然と共生し、活用することによって守られてきた自然環境を中心に、
来訪者も自然環境の保全や持続可能な取組に携わり、
地域の自然環境を一体となって守る仕組みができている

<ポイント>

- ①活用することで守られてきた豊かで開放感あふれる自然
- ②自然環境やその価値を体感できる空間や施設/設備
- ③環境保全への取組

①活用することで守られてきた豊かで開放感あふれる自然

蒜山はなだらかな山容を有しており、蒜山山頂部にはササの草原及びブナ林が、山麓部には、草原景観やコナラの二次林が広がります。蒜山三座の南方、標高 500m から 600m にある蒜山高原では、昔から放牧と採草に利用するために半自然草原が形成され、現在も地域の方々によって伝統的な火入れ（山焼き）が続けられてきたことで牧歌的な草原景観が保たれ、フサヒゲルリカミキリ、サクラソウ、キキョウなど希少な草原性の動植物の生息・生育地になっているとともに、豊かな自然環境によって育まれたきれいな川の水もあり、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオの生息地もあります。



蒜山高原



山焼き



登山道修復

②自然環境やその価値を体感できる空間や施設/設備

蒜山高原は、夏季の避暑を中心として、四季を楽しめるリゾート地として知られています。高原や田園の牧歌的な風景の中を走るサイクリングをはじめとして、蒜山三座への登山や周辺キャンプ場での滞在と夜の星空観賞、日本名水百選の一つである塩釜の冷泉や、周辺の観光・食事施設の周遊が楽しまれています。

また、令和3年には、誰もがサステナブルの価値を身近に体感できる観光文化発信拠点施設として「GREENable HIRUZEN」が開設されました。CLT パビリオン「風の葉」をはじめ、ミュージアム、ストア、アクティビティを通じて、訪問者がカッコいい・美味しい・面白い・楽しいと感じる学びや体験を得ることで、結果的に日々の暮らしを見つめなおし、持続可能な暮らしへの転換を図ることを目指した施設です。

このように、蒜山地区及びその周辺には、自然を存分に楽しめるだけでなく、その価値や持続可能な取組などにも触れられるような空間や施設、設備が存在します。



サイクリング



塩釜冷泉



キャンプ体験



GREENable HIRUZEN

③環境保全への取組

蒜山においては、豊かな自然環境を持つ蒜山高原や自然の中で育まれる動植物や食などを含めた営みを後世に受け継いでいくため、下記のような環境保全や持続可能性の実現に向けた取組が実施/検討されています。

ア) 教育旅行

真庭観光局としては、「たった 100 万年のおくりもの」をテーマとして、教育旅行の誘致に力を入れています。昨今は初等教育や中等教育でも SDGs を扱うようになっており、従前からバイオマスの活用を始めとした種々の取組を蓄積してきた真庭市は、課外授業のフィールドとして選ばれるようになってきています。



キーコンセプト



教育旅行に適したツアー

イ) ボランティア活動

自然環境の保全への再投資について、金銭的な還元だけでなく維持作業へ参加するような形態も想定することができます。蒜山高原の半自然草原エリアでは定期的な山焼き、草刈りや茅刈りが必要ですが、作業の一部は体験プログラムとしてメニュー化されています。

また、草刈りのプログラムは、ボランティア休暇を制度化している企業が会社単位で参加しています。



茅刈り



山焼き

ウ) バイオマス利用

バイオマス利用については燃料としての利用に留まらず、材の伐出と CLT への加工を市内で行っており、CLT を造る現場や CLT を活用した建物の見学を行うツアー等も提供しています。地域の中でバイオマスが調達・活用され、その利益が山に返っていくといったストーリーを提示することができます。



バイオマスツアー

エ) 登山道整備

蒜山（真庭市）及び毛無山（新庄村）をフィールドとするトレイルランニング大会“FORESTRAIL”は、国立公園区域内の登山道をコースとして使用されています。

蒜山自然再生協議会との連携により、登山道の整備にランナーが参加する取組を実施されています。ただし、大会の実施による登山道への負荷を解消できる作業量ではないため、ランナー以外の参加も受け入れ取り組んでいます。



蒜山登山道



FORESTRAIL

オ)人材交流

上記の自然保全活動やガイド等を中心として、大山エリア/鏡ヶ成エリアとの人材交流等も検討がされており、大山蒜山地域一体としての人材交流の機運も出始めています。

W(Weakness | 課題)

来訪者が宿泊しないため滞在時間が短く、

魅力を伝えるプレイヤーも不足しているため地域の魅力を体感しづらい

＜ポイント＞

- ①宿泊施設が少なく、設備が老朽化している
- ②周辺エリアとの連携不足
- ③ガイド等のプレイヤー不足

①宿泊施設が少なく、設備が老朽化している

蒜山地区内の宿泊施設としては休暇村蒜山高原が団体客等にも対応できる収容数がありますが、それ以外の周辺の宿泊施設は小規模の施設が中心であり単独で一定の床数を確保できる施設は僅少となっています。またサイクリストが多い一方でサイクリストに適した施設がない、老朽化が見られるなど、訪問者を満足させる設備を兼ね備えた施設もない状況です。

②周辺エリアとの連携不足

時間距離の面からは江府町、伯耆町、大山町などの豊かな自然体験が可能な近隣市町村をフィールドとして体験プログラムの提供を行うことも想定されていますが、県境を跨ぐことへの意識面の障壁があるとの指摘があります。

また、サイクルルートについては、エリア内には専用自転車道が整備されている一方、大山周遊道路と接続するような本格的なルート造成は、安全性などの点から事業化されておらず、周辺エリアとの連携が不足している状況です。

③ガイド等のプレイヤー不足

蒜山地域のガイド人材は豊富とは言えず、高齢化も進んでいます。若い世代が専業で行うのは難しい状況があり、兼業で 40 代くらいのガイド人材が数名いる程度で、人材の確保や育成については課題となっています。

また、観光施設等の立ち寄り箇所はあるものの、国立公園ならではの自然の価値・魅力を体験する機会が限られています。

1)-5 集団施設地区以外のエリアについて

集団施設地区ではないものの、大山蒜山地域内には「ならでは」の感動体験、大山蒜山地域に共通したストーリーを味わうことのできる特徴的なエリアがあります。

○三徳山エリア（三朝町）

国宝を有する三徳山を中心とする山岳信仰や修験道の歴史文化、三佛寺奥院（投入堂）などの信仰を体現した寺院があり、特徴的な地形や植生分布による稀有な自然環境と混然一体になることで優れた風致景観が形成されています。

三徳山においては山護運動（麻袋を持って登り、登山によって削れる場所に土嚢を埋めていく）といった訪問者参加型の自然保全活動や、僧侶の格好をして掃除などお寺のお仕事体験ができる「令和の一休さん」など、地域ならではの資源を受け継ぎ、その価値を知ってもらうための取組も行われています。



三徳山の景観



三佛寺奥院(投入堂)

○船上山エリア（琴浦町）

船上山は、平安時代の初期ごろ（約 1200 年前）から山岳仏教が栄え、大山、三徳山とともに伯耆三嶺と呼ばれ修験の地として栄えました。歴史的な背景から、地域の方からも愛着を持たれており、船上山の山麓にある清元院では座禅体験を行うこともできます。

また、琴浦町においては、海と山が一体となった風致が形成されており、一向平のキャンプ場や大山滝、海側では鳴石の浜（大山の噴火でできた安山岩が海の中でぶつかって丸くなった石の浜）など、自然豊かな場所でアクティビティや体験が可能です。食の面では、大山の恵みとしての野菜、畜産品や大山の良質な地下水により育まれるとっとり琴浦グランサーモンなど、豊かな食体験も特徴です。



船上山



鳴り石の浜



とっとり琴浦グランサーモン

○毛無山エリア（新庄村）

毛無山を主峰とする 1000m級の美しい連山に囲まれ、岡山県三大河川のひとつ旭川の源流域にもあたります。毛無山にあるブナの原生林を中心とした混生樹林が多く植物、野鳥の宝庫となっており、春にはカタクリが群生します。

新庄村は「日本で最も美しい村」に認定され、豊かな自然に囲まれた空間での森林セラピーの体験や、旭川の源流である毛無山一体から湧き出る清流や肥沃な大地からのもち米で作られた地域特産の「ひめのもち」などの食べ物からも、自然の恵みを存分に感じることができます。



毛無山のブナ林



ひめのもち

2) 大山蒜山地域における強みと課題

1) で整理した集団施設地区等の強みと課題を踏まえ、大山蒜山地域における利用の高付加価値化に向けて活かすことのできる強みや今後解決すべき課題について、以下に掲げます。

S (Strength | 強み)

山岳信仰や自然の利活用など、人々の営みによって守られてきた豊かな自然環境や歴史文化とそれらを維持し拡大していく仕組みがあること

<ポイント>

- ① 山から海まで、極相林から牧草地まで、多様な自然の姿を体感できる
- ② 大山信仰に代表される歴史文化が地域の風致と一体となって継承されている
- ③ 資源の持続可能な活用に利用者等が参加する仕組みが各地で運用されている
- ④ 広域周遊のための各種取組が推進されており地域外を含めた連携が期待される

大山蒜山地域の強みとしては、地域で暮らす人々の営みによって守られてきた多様な自然環境、歴史文化やそれらを受け継いでいくための仕組みづくりがあることです。

大山や三徳山などにおいては山岳信仰や修験道の主要拠点として栄えてきた歴史から地域ならではの自然環境が残されてきたことや、蒜山地域においては地域で暮らす人々が自然を利活用し共生することでその環境が守られてきました。

人々の営みによって守られてきた自然環境や歴史を後世にも受け継ぐために、各地で今も様々な自然保全の取組がなされています。

以下に、大山蒜山地域の強みの詳細を記載します。

① 山から海まで、極相林から牧草地まで、多様な自然の姿を体感できる

大山蒜山地域においては、山、里山、海が一体となった景観や、極相林から牧草地まで、多様な自然環境を体感することができます。

その楽しみ方も様々で、登山や高原リゾートでの滞在に加えて、皆生温泉を発着する1,000人規模のトライアスロン大会、夜間の星空観賞、日野川河口から大山山頂までを一体的に活用したスポーツイベント“Sea to Summit”、大山や蒜山三座を望むフォトスポットでの写真撮影、蒜山・新庄一帯をフィールドとするトレイルラン“FORESTRAIL”など、雄大かつ多様な自然資源の魅力を、新たな視点で体験できるプログラムやコンテンツが造成されています。スポーツイベントの前後やトレーニングなど、スポーツに関わる来訪者は、リピーターとしての定着や地域内での長期滞在にもつながることが期待されます。

冬季には豊富な降雪がみられ、スノーシューを用いたアクティビティ等を通じて、無雪期とはまったく異なる自然風景を体験することができます。複数のスキー場が整備されており、大山寺エリア周辺及び桝水高原のゲレンデからは、日本海や夜景を望む特徴的なロケーションを楽しむことができます。

また、奥大山自然塾（江府町）や、民間事業者による大山山麓をフィールドとしたサマーキャンプの実施、蒜山エリアにおける山焼き等のボランティア活動・ツアープログラム、ひるぜん大根の収穫体験・ジャージー牛の酪農体験等の教育プログラムなど、自然環境の保全活動や環境教育的な文脈から地域ならではの自然に関わることができるプログラムも提供されています。

②大山信仰に代表される歴史文化が地域の風致と一体となって継承されている

「大山さんのおかげ」と表現され、周辺地域の生業や生活の中に息づく大山信仰の姿は、大山蒜山地域における様々な場所で歴史・文化資源として残されています。

大山山麓一円を取りまく「大山みち」は、現在も複数のルートが残されており、大山寺・大神山神社奥宮への参詣道、自然散策路、トレッキングルート等として利用されています。道標や一町地蔵など、歴史・文化資源として高いポテンシャルを有する区間も存在し、関係者による維持管理や、「奥大山古道ウォーク」（江府町）などイベントでの活用事例も見られます。

三徳山投入堂への登拝は、海外からの旅行者を中心に、唯一無二の体験としても評価されています。また後醍醐天皇をめぐる太平記のストーリーは、大山蒜山地域においては船上山を舞台とする、特徴的な歴史文化資源の一つです。

また、歴史・文化資源としての蓄積にとどまらず、水とのかかわりや大山山麓の植生など、自然資源にもその影響を伺うことができます。例えば、大山の信仰によって残されてきたブナは保水性が高く、結果的に大山はミネラル豊富な水を育む命の循環装置として機能してきました。

このように、大山蒜山地域において、自然資源や歴史・文化資源が「なぜそこにあるのか」という成り立ちを地域のストーリーとともに実感できることは、利用者にとって自己を見つめ直す体験につながり、特に SBNR 層（Spiritual But Not Religious: 特定の宗教を信仰しないが、精神的な豊かさを求める層）と言われる人々への親和性が高いです。

③資源の持続可能な活用に利用者等が参加する仕組みが各地で運用されている

大山の一木一石運動は、利用者の参加による自然資源の持続可能な活用を企図した取組として、非常に先駆的な事例の一つであり、その取組は昭和 50 年代から現在まで継承されています。登山道の整備や山頂トイレ汚泥の撤去においても、利用者参加の取組がなされています。

また、大山の入山協力金は、社会実験と実証実験を経て 令和 4 年 6 月に制度化され、初年度から運用の成果を上げています。今後はより効果的な活用に向けた、さらなる展開が期待されます。

蒜山地域においては、草原景観の維持や登山道の整備・補修について、実作業を伴う体験プログラムとしてのメニュー化を行う等、地域外の利用者等の継続的な参加を促進する取組がなされています。

三徳山においては山護運動（麻袋を持って登り、登山によって削れる場所に土嚢を埋めていく）といった訪問者参加型の自然保全活動も行われています。

その他、スポーツイベント参加費の一部を環境保全協力金として保全団体へ寄付することや、水源地となる森林等の維持管理を協定に基づき官民連携で行う等、対象となる資源や関係者に応じた参加の手法が検討、実装されています。

④広域周遊のための各種取組が推進されており地域外を含めた連携が期待される

令和 5 年 3 月に、鳥取・島根エリアとして「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり」モデル事業（観光庁）の認定を受けており、コンテンツの世界レベルへの磨き上げなど、本事業との共通要素が多く含まれ、連携による相乗効果の発揮が期待されます。

また、高価格帯宿泊施設の開業予定（鳥取市）、ナショナルサイクルルートの認定を目標としたハード・ソフト整備（鳥取県）、周遊貸切タクシーの運行支援（鳥取県西部圏域）、旧国民宿舎を活用した施設整備（倉吉市）、地域内外の休暇村を接続する周遊交通の提供、日本遺産（大山、三徳山、麒麟のまち、北前船）を軸にした連携など、主に山陰地方を中心とした広域周遊のフックとなり得る複数の取組も見られます。

W(Weakness | 課題)

地域内の様々な資源を地域における一連の魅力・体験へ
落とし込む取組や体験の磨き上げが不足しており、
地域一体での周遊がなされない

<ポイント>

- ①地域全体としては様々な楽しみ方があるものの、それらが地域の一連の
魅力体験になっていない
- ②夜間コンテンツや地域の魅力を体現した宿泊施設が少なく、訪問者の滞在
時間が短い
- ③地域の魅力や地域資源の貴重さを伝えるプレイヤーが不足している
- ④二次交通の課題もあり、周遊するための環境整備ができていない
- ⑤集客における季節偏重が大きい

大山蒜山地域の課題は、地域内にある様々な資源が訪問者にとって一連の魅力体験への
落とし込みには至っておらず、また磨き上げが不足しており、訪問者の滞在時間が短く、
日帰り利用になってしまっていることです。以下に、大山蒜山地域の課題の詳細を記載し
ます。

①地域全体としては様々な楽しみ方があるものの、それらが地域の一連の魅力体験に なっていない

大山蒜山地域の強みである、多様な自然環境の背景にある歴史文化や地域の方々の営み
などの体感が、一連の魅力ある体験として落とし込まれていません。例えば、一般にイメー
ジされる「大山」は山麓西側からみた伯耆富士や、大山寺地区の自然・歴史・文化資源に
偏っており、大山山麓一円としての周遊促進、宿泊や体験の提供、情報発信に課題があり
ます。

また、大山蒜山地域における自治体同士の連携が限られており、地域一体としての魅力
体験を提供できていません。

②夜間コンテンツや地域の魅力を体現した宿泊施設が少なく、訪問者の滞在時間が短い

登山やサイクリング、スキーなどの様々なアクティビティや、歴史文化を感じられるス
ポットが存在するものの、ナイトタイムのコンテンツや地域の魅力を存分に感じられるよ
うな宿泊施設が少なく、訪問者が地域内には宿泊せず通過型の利用になってしまってい
ます。

特に大山寺から栲水高原にかけてのエリアは、自家用車であれば宿泊集積地（国立公園
外）の米子市や境港市まで 30 分程度で移動でき、将来的に国立公園内の利用拠点で夜間
のコンテンツを提供したとしても、市街地の宿から参加できてしまいます。

③地域の魅力や地域資源の貴重さを伝えるプレイヤーが不足している

自然とその背景にある歴史・文化資源に関わる、学びを伴う体験を提供するガイドや施設の運営者は必須ですが、人員不足が課題となっています。

ガイドに関しては、エリアによっては専門のガイドがおらず、兼業またはボランティアガイドのみの場合もあります。大山蒜山地域においては自然系の視点と文化歴史的な視点の双方が求められるものの、ガイドにより対応可能な分野は異なります。また、地域内でガイド団体やグループが複数並立する状況もみられます。

④二次交通の課題もあり、周遊をするための環境整備ができていない

地域全体として二次交通には大きな課題があり、電車やバスの本数やルートが限られ、日本人旅行者も外国人旅行者も、自家用車またはレンタカーでの移動が前提となっています。

また、タクシーの供給量は全体的に不足しており、時期やタイミングにより観光需要に対応できない状況が発生しています。

⑤集客における季節偏重が大きい

大山蒜山地域においては、地域ごとに集客の季節偏重が生じています。例えば、スキー場のある大山寺地区では、スキーシーズンへの偏重が見られ、グリーンシーズンの誘客に課題があります。一方、三徳山周辺では、冬季の訪問者が少ないため、飲食店等が営業を停止しています。また、イベント時にのみ訪問者が増加し、年間での平準化がされていない地域もあります。

3 大山蒜山地域 利用の高付加価値化の方向性

第3章では、第2章で整理をした強みや課題を元に、大山蒜山地域が利用の高付加価値化において目指す姿を掲げ、その実現に向けて必要な具体的な方向性について検討します。

大山蒜山地域で目指す姿を以下に示します。

大山蒜山地域を目指す姿

人々の営みによって守られてきた豊かな自然環境やその背景にある多様な歴史文化を、一つのストーリーのもとに場所や時期によって変化する様々な体験価値に落とし込み、来訪者の地域内の周遊を実現する

目指す姿の実現に向けて、まずは大山蒜山地域において地域の方々が大切に受け継いできたものをストーリーとして明文化した上で、それらを訪問者に対する感動体験の方向性に落とし込み、訪問者に対して地域ならではの価値や意義を伝えていくために資源、伝えたい情報、望まれる体験等を整理したインタープリテーション全体計画を策定することが必要です。

以下に、項目ごとに整理を行います。なお、各項目の内容の検討過程は、資料編(3)基本構想策定の経緯に記載します。

目指す姿の実現に向けて整理する項目

- (1) ストーリー
- (2) 感動体験の方向性
- (3) インタープリテーション全体計画の方向性

(1) 大山蒜山地域のストーリー

大山蒜山地域にはこれまで地域の人々の山岳信仰や自然保護などの営みの長い歴史があり、それらの背景によって形作られた自然・文化・生活が今の大山蒜山地域ならではのストーリーです。

大山蒜山地域の魅力的な自然環境や人々の営み・文化の価値を地域の方々がしっかりと理解し対外的に伝えていくことが重要であり、そのために以下にて一つのストーリーを掲げます。

Story

人々の営みの歴史が刻まれた山々が 自然・文化・生活を育む



ストーリーの背景にある、大山蒜山地域ならではの価値として以下の3つのポイントが挙げられます。地域の持つこれらの価値を最大化し、より磨き上げ、来訪者にとって滞在体験のコンテンツとして作り上げるにより、利用の高付加価値化を目指します。

●人々の営みの中で育まれてきた信仰と自然共生（自然保護・自然保全）の歴史

大山は、『出雲国風土記』の国引き神話に「伯耆国なる火神岳」として登場する、文献にみえる日本最古の神山です。中腹の大山寺に祀られる地蔵菩薩は、山頂の池から現れたとされ、水を恵み、現世の苦しきから万物を救うと信じられた仏さまです。このため、人々は延命をもたらす「利生水」と地蔵菩薩のご加護を求めて参詣し、五穀豊穡も祈願しました。このように地蔵菩薩と水とが密接に結びついた大山独特の地蔵信仰が大山への信仰として根付いていきました。そして現在に至るまで、自然を畏れ敬うこと（信仰文化）によって、大山の自然環境が守られてきました。

同様に、古来より山岳信仰の霊場として栄えてきた三徳山エリアにおいても、信仰文化ゆえに特徴的な地形や植生分布による稀有な自然環境が保護され、優れた風致景観が残されています。

また、蒜山エリアにおいては、生活のうえで必要な資源を地域の里山から持続的に採取するため、資源を取り尽くして自然を壊さないように工夫することで自然を利活用し共生することで自然環境が保全されてきました。代表的な例として、今も行われている山焼きは、少なくとも800年ほど前から、蒜山に暮らす人々によって行われてきました。積極的に草刈りや山焼きをすることで半自然草原を維持し、草を田畑の肥料や牛馬の餌、茅葺屋根に活用するなど、自然と共存した生活を営んできました。

このように、地域で暮らす人々の営みの中で大山蒜山地域の山々を中心とした自然環境が守られ、今なお豊かで特徴的な自然環境が受け継がれてきています。



大山



蒜山三座



三徳山

●地域特有の価値ある資源

本州西部では最高峰となる大山とその東南に続く蒜山、船上山、毛無山、三徳山等の山々と一体的な山麓部を含む自然生態系、そして人々の営みの中で形成された自然環境は、この地域の最も重要な資源として国立公園に指定されています。

西日本最大級のブナ林があるほか、鳥類ではオオルリ、イヌワシやクマタカ、ブッポウソウ等、両生類ではオオサンショウウオ等、昆虫類ではフサヒゲルリカミキリやゴマシジミ等、この地域固有の動植物も生息・生育しており、他の地域では類を見ない自然環境があります。



大山のブナ林



山焼きや草刈りで維持される蒜山の草原



地域固有の動植物

●食文化

自然環境の恩恵はこの地の人々の食文化にも影響しています。山々が作り出す水や土は動植物の生命を育み、さらには里地里山や海にまでその恵みをもたらしています。生産者や地域住民は、地域で取れる肉や魚（大山どり、鳥取和牛、とっとり琴浦グランサーモンなど）、お米、野菜や果樹（白菜、大根、キャベツ、スイカなど）などの食材が大山の天然地下水や大山の火山灰土（黒ボク土）による土壌で育っているからこそおいしいと感じています。



鳥取和牛



ひるぜん大根



海の恵み

(2) 感動体験の方向性

国立公園の提供価値は、訪問者が多様な自然風景と、生活・文化・歴史が凝縮された物語を知ること、訪問者に唯一無二の感動や体験ができることにあります。

大山蒜山地域における感動体験の方向性について、以下3点を掲げます。

①歴史や成り立ちを知る

訪問者は、ガイドによるツアーや、自然環境やその背景にある歴史文化に対する理解の深い地域の事業者（宿泊/飲食事業者）との対話を通し、大山蒜山地域の歴史や成り立ちについて知ります。この地域の価値を地域の方々から直接聞き、知識を深め、理解することで、体験に付加価値を与え、ここで体験するすべてが一つのストーリーの上で成り立っていることを理解します。これら地域に関する価値を伝えることができる人材の育成が最も重要です。

(ex ツアーガイド、飲食店による食材と自然環境とのつながりの説明)



②実際に見て体感する

大地の活動、山岳信仰、自然との共生によって形成された自然環境を実際に自分の目で見て、肌で感じる体験を行います。ただ雄大な自然を体感するのではなく、この地域の歴史や成り立ちを知った上で体感する自然環境はより価値ある体験となります。

(ex 自然体験アクティビティ)



③地域の営みに触れる

食体験、信仰文化や自然保護活動に関連するコンテンツの体験により、大山蒜山地域がもたらす恩恵を実際に享受することで、この地域での唯一無二の感動体験を作り上げます。地域の人々が自然を守ってきた営みを滞在者が五感で感じられるような体験の磨き上げを行います。

(ex 食体験・宿坊などの文化体験・山焼きなどの保護活動)



(3) 大山蒜山地域におけるインタープリテーション全体計画の方向性

インタープリテーションとは、地域の自然・歴史・文化・社会等が持つ価値や魅力について、来訪者にわかりやすく伝えることで、来訪者と地域に特別なつながりを作るコミュニケーションを示します。

インタープリテーション全体計画では、重要な資源、来訪者に伝えたいテーマ（メッセージ）、来訪者に望まれる体験、利用者の類型や分析、推進するアクティビティ等を整理するものです。地域が一体となって、ハード・ソフト両面の整備を一貫して行い、統一されたブランディングと「感動と学び」の体験価値創出を進めることが求められます。

大山蒜山地域におけるインタープリテーション全体計画の設定にあたっては、下記の 5 つの要素を整理し、今後地域関係者との議論等踏まえ、更なる精査をしていきます。

▶ **Why（なぜ）：使命・目的**

▶ **What(何を)**

▶ **Who（だれに）**

▶ **When・Where（いつ・どこで）**

▶ **How（どうやって）**

Why（なぜ）：使命・目的

大山蒜山地域におけるインタープリテーションの使命・目的は、「山岳信仰や人々の営みによって守られてきたこの地域の自然・文化・営みを次世代に引き継ぐ」こと、そしてそれを地域関係者・利用者で共通認識としてもつことです。

What（なにを）：

大山蒜山地域には、独自の自然環境や歴史文化がありますが、その中でも特に「大山や蒜山等の山々」、「自然共生（自然保護・自然保全）」、「水」に対して地域関係者が魅力・誇りを感じています。

伝えたいメッセージ・経験してほしい体験に対する意見の一例は以下のとおりです。

「大山や蒜山等の山々」

大山は、見る角度や登るルートごとに特徴や歴史があり、それぞれに意味がある。

蒜山は、地域の人々のなりわいとともに保護されてきた文化がある。

「自然共生（自然保護・自然保全）」

一木一石運動、山焼きなどを通じて、自然によって地域が守られ、地域に訪れた方も自然を守っているという意識を持ってほしい。

「水」

大山の水や、その水によって育まれた野菜や動物などの食べ物のおいしさは、山岳信仰や自然との共生によって守られてきた貴重な自然環境に由来する。

Who（だれに）：

特に「大山蒜山地域の自然環境と結びついた歴史・文化に浸り非日常を味わうことを目的とした来訪者」として、宿泊客、アクティビティやガイドの体験者、ボランティア参加者、寺社仏閣等への来訪者、登山者等を対象とします。

When・Where（いつ・どこで）：

地域への来訪者に対して、対象者ごとに説明することを想定しています。

【宿泊客】

宿泊施設を通じて、チェックイン時や食事時間等に伝える想定

【アクティビティやガイドの体験者、登山者等】

アクティビティ事業者・ガイド、解説看板をインタープリターとし、利用体験時を想定

【寺社仏閣等への来訪者】

寺社仏閣等への来訪時に僧職や神職や解説看板により伝えることを想定

【ボランティア参加者】

ボランティア参加時に説明することを想定

【日帰り利用も含めたすべての利用者】

飲食店やお土産店、公共施設の管理者、住民などが様々な場面で伝える想定

How（どうやって）：

インタープリテーションにあたっては、大山蒜山地域に関係する行政機関、地域事業者が協力し、大山蒜山地域のPR時に説明を付与することを想定します。

そのために、インタープリテーション全体計画を作成するとともに、知見を共有し、役割を確認するための学習の機会を設け、全ての関係者がインタープリターであるという意識を醸成します。

4 大山蒜山地域における利用拠点

第4章では、大山蒜山地域の目指す姿の実現に向けて、国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設を中心とした面的な魅力向上の場となることが想定されるエリアとして「利用拠点」を設定し、利用拠点における拠点整備の目標像について検討しています。

(1) 利用拠点とは

利用拠点は、先端モデル事業対象4公園における各地域での検討結果を基に、取組方針に定められた利用拠点の選定の考え方及び専門委員会（非公開）の意見を踏まえて環境省が選定するもので、対象公園において集中的に魅力向上に取り組む拠点となります。

(2) 利用拠点選定の考え方

利用拠点選定にあたっては、推進体制の構築状況、国立公園としての滞在型・高付加価値観光推進のポテンシャルの2点を踏まえて検討がなされます。

<利用拠点選定の考え方>

①推進体制の構築状況

- ・関係地方自治体の積極的な参画・協力が得られること。
- ・国立公園満喫プロジェクト地域協議会等における合意が得られる見込みがあり、地域の気運が醸成されていること。
- ・現地における地域協働体制、事業実施体制の構築が見込めること。特に、利用拠点の面的な魅力向上に向けた取組に関するリーダー又はコーディネーターとなる者が存在すること。
- ・令和6年度から利用拠点における具体的な取組に着手できること。
- ・これら推進体制の構築状況を踏まえ、実現可能性が高いと認められること。

②国立公園としての滞在型・高付加価値観光推進のポテンシャル

- ・基本構想（案）の検討を通じて、当該公園の利用拠点において、自然を活用した滞在型・高付加価値観光を進めるポテンシャルが示されていること。
- ・基本構想（案）において、当該地域の利用の高付加価値化の方向性が示されており、有効と認められること。

(3) 大山蒜山地域における利用拠点について

大山蒜山地域の中でも、国立公園ならではの感動体験を提供できる利用拠点の候補として想定される、集団施設地区4地区（大山寺地区、鏡ヶ成地区、榎水高原地区、蒜山地区）に関して、第2章(2)の1)で整理した内容を踏まえ、以下のとおり方針を整理し、集中的に魅力向上に取り組む利用拠点の候補を「大山寺地区」とすることとしました。



利用拠点の選定（案）

大山隠岐国立公園大山蒜山地域大山寺エリアにおける利用の高付加価値化検討のためのワーキンググループ（令和6年8月2日開催）資料を出席者意見を踏まえ修正

- ・ 大山寺エリアは、**ブナ林に代表される植生などの自然資源と、大神山神社や大山寺に代表される歴史・文化資源の相互作用により維持されてきた風致景観**が残されており、大きな魅力となり得る
- ・ 登山やガイドウォーク等の**自然体験アクティビティを通じて**、自然資源としてだけでなく、その背後にある歴史・文化資源との関わりを知ること、**奥深い体験を得る**ことが可能
- ・ 大山寺エリア一帯の魅力向上に、国、地方公共団体、地域住民や民間事業者が連携して取り組む体制が組織され、議論が進められており、**公民連携で滞在体験の魅力向上を進める機運が醸成**されている
- ・ 宿泊施設の確保については、**集団施設地区を構成する民有地が想定される**。核となりうる宿泊施設事業者の参画を得て議論を進めている一方、**廃屋や廃業の可能性のある施設が多く存在する**

大山寺エリアを利用拠点に選定し、面的な魅力向上の検討を深めていく

検討の方向性（案）

- 民間企業のアイデアや資本の活用も含め、**一体的なブランディング・ストーリーの整理のもと、大山寺参道エリア周辺を中心としたエリア**ならではの滞在拠点の確保、滞在型の体験の推進に重点的に取り組むことで、大山寺エリアの魅力が十分に伝わる利用を推進する
- 具体的には、信仰の歴史に紐付いた宿坊での体験や寺社・歴史文化巡り、信仰により守られてきたブナ林の散策、キャンプ等のアウトドア活動、大山の豊かな水がもたらす食の恵みや食文化の体験等、**幅広い活動の拠点として宿泊施設や滞留施設の確保を行う**とともに、参道の景観を改善する
- 大山寺エリアにおいて滞在型の利用が増加することにより、**大山・蒜山地域全体の周遊利用**が促進されるほか、さらに**広域にわたる周遊利用**を促進する



図：大山蒜山トレッキングコースマップより（環境省発行2018年）

そして、環境本省において、専門委員会の意見を踏まえ、令和6年10月に大山蒜山地域の利用拠点として「大山寺地区」が選定されました。

大山寺地区においては、目指す姿である「人々の営みによって守られてきた豊かな自然環境やその背景にある多様な歴史文化を、一つのストーリーのもとに場所や時期によって変化する様々な体験価値に落とし込み、来訪者の地域内の周遊を実現する」ことに向けて、面的な魅力向上の場を目指すための推進体制が構築されており、観光まちづくりに向けて大山町DMOの設立準備も進んでいます。

大山寺地区の強みとして「大山信仰の歴史によって守られてきた文化・自然環境や、その恵みとしての食文化・水などの豊富な資源」が挙げられました。他方、「地域の魅力を存分に感じられる宿泊施設が少なく、観光客の周遊につながるコンテンツが少なく、廃屋等も存在し、滞在時間が短い」という課題を抱えています。廃屋や廃業の可能性のある施設が多く存在し、地区の歴史的な価値でもあり体験価値ともなる宿坊の継続性や宿泊施設のあり方を含め、今後の方向性を検討したいという地域の機運があり、面的な魅力向上に向けた方向性が整理されています。

〈選定理由(令和6年10月21日 環境省発表)とその背景〉

①推進体制の構築状況

自治体、観光事業者、交通事業者など地域の関係者等が参画する「大山寺地域ワーキンググループ」を通じて基本構想案の検討に着手し、また取組推進に係る合意の取り交わしとして大山町と協定を締結済みであり、関係自治体の積極的な参画・協力及び地域の気運醸成が認められる。

(選定理由の背景)

- ・大山寺エリア一帯の魅力向上に、国、地方公共団体、地域住民や民間事業者が連携して取り組む体制が組織され、議論が進められており、公民連携で滞在体験の魅力向上を進める機運が醸成されている
- ・加えて宿泊施設の確保については、集団施設地区を構成する民有地が想定されるが、核となりうる宿泊施設事業者の参画を得て議論を進めている

②国立公園としての滞在型・高付加価値観光推進のポテンシャル

地元自治体や関係事業者からのヒアリングや基本構想案の検討を通じて、面的な魅力向上に向けた方向性が整理されており、利用の高付加価値化に向けた方向性が示されていると認められる。

(選定理由の背景)

- ・大山寺エリアは、ブナ林に代表される植生などの自然資源と、大神山神社や大山寺に代表される歴史・文化資源の相互作用により維持されてきた風致景観が残されており、大きな魅力となり得る
- ・登山やガイドウォーク等の自然体験アクティビティを通じて、自然資源としてだけでなく、その背後にある歴史・文化資源との関わりを知ること、奥深い体験を得ることが可能
- ・地域ならではの魅力を体現し、様々な奥深い体験をする場である宿泊施設を中心として、地域一体で様々な自然・歴史・文化体験を提供するという方向性について地域で議論を進めている。

大山蒜山地域においては、拠点として選ばれた大山寺地区を中心に、引き続き地域の関係者等と連携し、利用拠点マスタープラン等の策定、地域協働実施体制の構築、自然体験アクティビティとの連携、国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設の確保、保護と利用の好循環の仕組みづくり等の取組を進め、滞在体験の魅力向上を図ります。

(4) 利用拠点である大山寺地区の拠点整備の目標像

大山蒜山地域の利用の高付加価値化の拠点として、大山寺地区を中心とした拠点整備の目標像を記載します。

大山信仰の歴史によって守られてきた文化・自然環境や、その恵みとしての食文化・水などの豊富な資源という強みを活かしつつ、空き施設も存在し、地域の魅力を存分に感じられる宿泊施設が少なく観光客の周遊につながるコンテンツが少なく、廃屋等も存在し、滞在時間が短いという課題を解決しながら拠点整備を目指すため、大山寺地区においては、以下の拠点整備の方向性を掲げます。

＜拠点整備の方向性＞

既存の宿泊施設や空き施設を活用し、地域の魅力を体現した宿に
していくことで、宿を起点に訪問者が地域を周遊しながら
地域ならではの価値を体感できる拠点づくりを進める

こうした方向性のもとで、大山寺地区では、地域ならではの既存の宿泊施設（宿坊や自然に浸れるお宿など）を中心として、飲食店や物販店、地域を取り巻き・または仰ぎ見・触れることのできる自然資源、お堂／お地蔵などの歴史資源も連携させ、訪問者が地域を周遊しながら地域ならではの価値（自然・歴史・文化）を感じることでサービスを提供を行い、まるごと楽しめる滞在空間を整備します。

既存の宿泊施設と空き施設の活用によって宿泊施設同士が連携を強め、さらにはその他の拠点利用に関わる飲食店や体験施設などが各施設の不足している機能を施設同士で補完することで、地域全体で訪問者の国立公園ならではの感動体験の価値を向上させていきます。



図 拠点整備のイメージ

<拠点整備のポイント>

- ・ 宿泊施設や飲食、体験拠点を分散させることにより、滞在者の地域での周遊を促す
【外へ出てもらう仕組みの創出】
- ・ 地域ならではの食を提供する飲食店や文化体験・自然体験コンテンツを地域の事業者各々が展開することにより、宿泊施設と機能補完を行う
【地域全体で滞在に必要な機能を補完】
- ・ 街並み整備やアクティビティ等も含めて、地域で発信するストーリー・メッセージにて統一された世界観を創出し、滞在者へ大山寺地区ならではの自然・歴史・文化における価値を必ず訴求する
【地域全体での提供価値の統一】

5 事業化に向けた推進体制とロードマップ

第5章では、利用の高付加価値化に向けた取組を継続的に推進するために求められる対応として、推進体制の枠組みや令和7年度以降のロードマップ等について検討しています。

(1) 大山蒜山地域における推進体制のあり方

大山蒜山地域においては、大山寺地区の事業者/行政機関/地域団体が中心となり、他の大山蒜山地域関係自治体等とも連携しながら、大山寺地区協議会で承認された取組を推進していきます。

計画策定にあたる意思決定から実行推進まで、それぞれ必要に応じた会議体で議論を行うことで、個々の事業者や住民がそれぞれの役割を果たしつつ、国や県、市町といった行政機関がそれらを支えつつ、現在大山町にて設立に向けて準備が進むDMOとの連携も図っていくことで持続的な取組にしていきます。

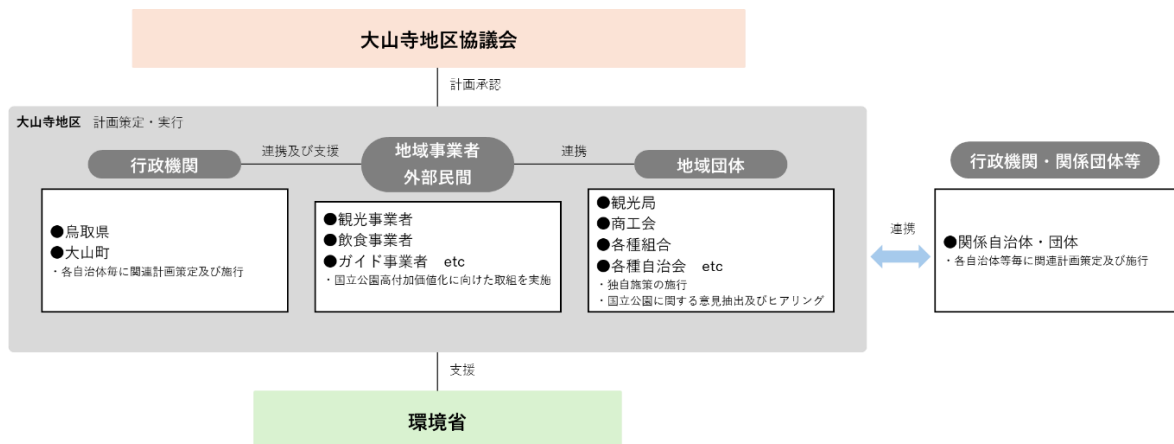


図 大山蒜山地域における推進体制

大山寺地区協議会及びワーキンググループの構成機関・団体

＜行政機関＞

鳥取県輝く鳥取創造本部観光交流局

大山町 商工観光課

＜民間機関・団体等＞

大山旅館組合

大山自治会

大山町商工会

一般社団法人大山観光局

一般社団法人山陰インバウンド機構

大山参道ホテル頂

プリムローズガーデン森と水の教会

日本交通株式会社

日本海観光開発株式会社

株式会社鳥取銀行

株式会社モンベル 広報部

(2) 今後の展開に向けたロードマップ

大山隠岐国立公園大山蒜山地域における滞在体験の魅力向上に資する取組は、下記のロードマップに沿って推進します。

令和7年度以降は利用拠点マスタープランの検討と策定を行い、利用拠点の高付加価値化の実施を検討します。取組の進捗に応じて必要な見直しを行うことで、地域の滞在体験の魅力向上を実現していきます。

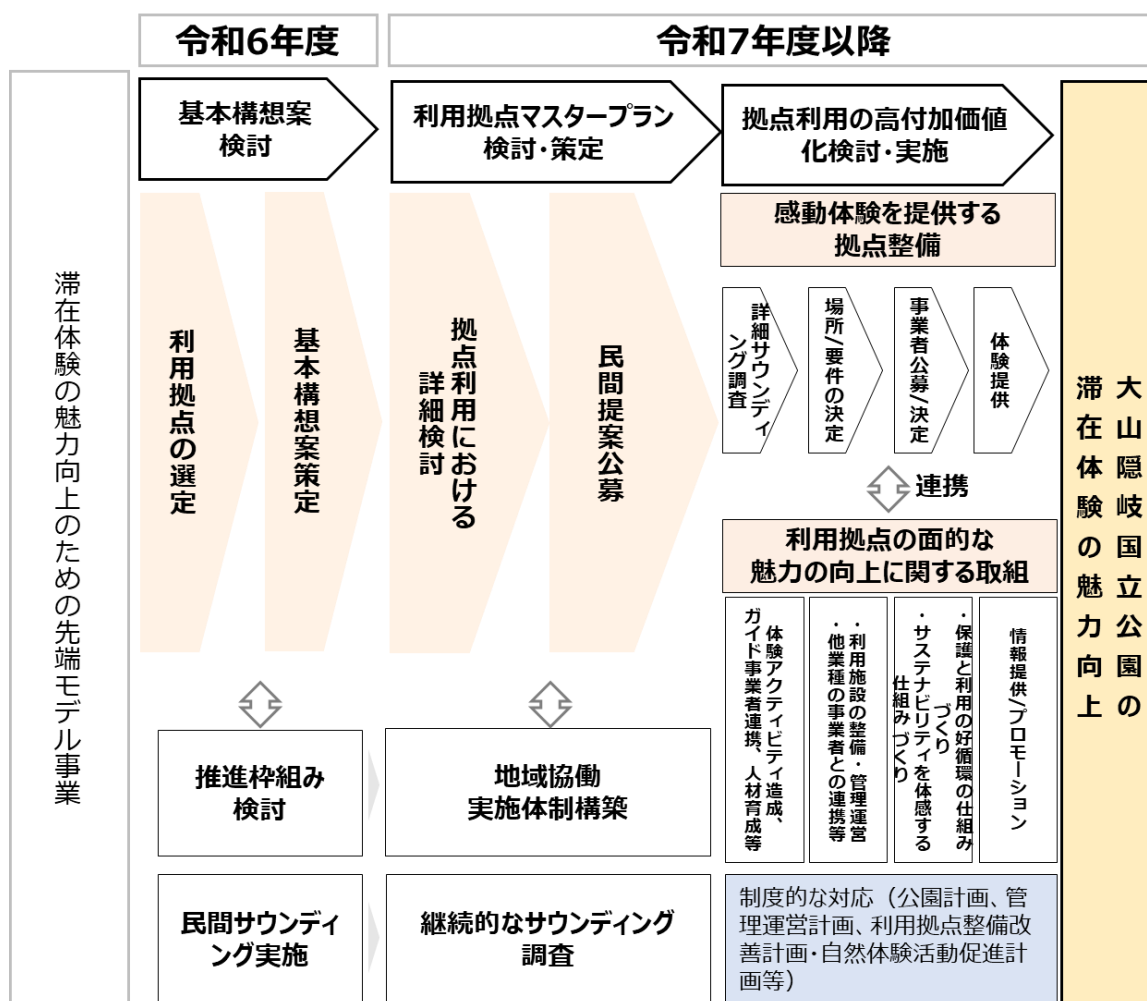


図 今後の展開に向けたロードマップ

(3) 今後の具体的な展開イメージ

上記のロードマップをもとに、令和7年度以降の大山蒜山地域における具体的な利用の高付加価値化の可能性について、サウンディングで得られた意見等を踏まえ、以下の3ステップにて例示します。

- STEP1. 大山寺地区ならではの魅力を体現した、感動体験を提供する宿泊施設/滞在施設（アクティビティ、飲食店、物販店）の整備
- STEP2. 大山寺地区における利用の高付加価値化をさらに進め、周遊を促すためのまちづくり
- STEP3. 大山寺地区を中心とした大山蒜山地域内の連携による地域全体の広域周遊促進

STEP1. 大山寺地区ならではの魅力を体現した、感動体験を提供する宿泊施設/滞在施設（アクティビティ、飲食店、物販店）の整備

大山寺地区ならではの魅力である「大山信仰の歴史によって守られてきた文化・自然環境」を訪問者に存分に伝えて感動体験を提供し、主な課題である「登山客などの日帰り客」に宿泊を促すための拠点整備の中心となりうる宿泊施設や滞在施設の整備方針に関して、以下に示します。

1-1.歴史・文化体験ができる宿泊施設/滞在施設

現在は地区内に1軒となってしまった既存の宿坊をより高品質な空間等に創出することで宿泊客の満足度を向上しつつ、本格的な精進料理や僧侶による座禅/写経体験など、その真正性は失わない形での運営を維持していきます。

さらに、使われていない宿坊やお堂を活用し、高付加価値な一棟貸しの離れ宿や歴史・文化の体験が出来る施設など、この地域ならではのストーリーの根源を肌で体感できる施設を増やしていきます。



宿坊からのお庭



阿弥陀堂



大山のお地藏

1-2. 自然体験に浸ることができる宿泊施設/滞留施設

日帰りをしてしまう登山客やアクティビティ・ガイド体験者向けに、自然体験に深く浸ることができる宿泊施設を確保します。

大山寺地区においては、新緑シーズン/紅葉シーズン/地域独自の植物/星空等を目的とした登山、シャワークライミング・スノーシュー・バックカントリー等、自然環境を利用するアクティビティや大山寺、大神山神社など歴史文化を巡る散策等、ガイドがつくことで非常に深い感動体験ができるものが多くあり、リピーターも多いです。一方で、それらの訪問者は大山寺地区に宿泊せず、米子・皆生・玉造などに宿泊をする現状があり、深い感動体験をした後ですぐに日常の感覚に戻ってしまうという課題があります。

そこで、登山客やアクティビティ・ガイドを体験する方の拠点となる施設運営を目指し、ガイドと宿泊者・宿泊者同士の交流ができる空間を創出し、大山の魅力を軸とした訪問者同士のつながりができることで、自然体験に加えて宿泊体験の価値も向上し、大山寺地区の魅力をさらに向上します。



新緑のブナ林



星空ツアー



スノーシュー

STEP2. 大山寺地区における利用の高付加価値化をさらに進め、周遊を促すためのまちづくり

STEP1. で確保した宿泊施設を起点に宿泊客を増加させつつ、地域ならではの食べ物を提供する飲食店や体験拠点施設・コンテンツを地域のそれぞれ事業者が展開し、また、大山寺地区における重要な拠点である大山寺に至る参道のあるエリアを中心に統一した景観整備をすることで、訪問者が周遊をしたくなるようなまちづくりも行っています。

大山寺地区においては、例えば、博労座駐車場を縮小し緑地化・公園化することや、参道の車両通行禁止、電柱地中化、参道沿いの廃屋撤去や景観整備、かつては牛馬市で人が多く行き交った博労座を活かした、国立公園に適する地域ならではのイベント開催、36体のお地蔵巡りのコンテンツなど、大山蒜山地域の核となる大山の山岳信仰にまつわる様々な歴史文化を地域一体で発信していくことで、大山寺地区ならではの魅力を地域全体で体感できる空間を創出します。



大山寺地区の中心地である参道エリア

STEP3. 大山寺地区を中心とした大山蒜山地域内の連携による地域全体の広域周遊促進

大山蒜山地域における滞在体験の魅力向上にあたっては、拠点である大山寺地区を中心として、地域ならではの共通のストーリー（p. 20 再掲）をベースに、地域ならではの自然環境やその恵みとしての自然体験、食体験や歴史・文化体験を軸として周辺自治体と連携することで、大山蒜山地域一体としての滞在体験の魅力向上による長期滞在や周遊促進を目指します。

Story

人々の営みの歴史が刻まれた山々が 自然・文化・生活を育む



大山蒜山地域内での具体的な連携の可能性としては、下記のようなものが挙げられます。域内の各市町村が「自然体験・保全活動」「歴史・文化体験」「食体験」「人材」などそれぞれの強みを活かしつつ課題を補完し合いながら、訪問者に対して地域全体としての広域周遊促進を目指します。

＜自然体験・保全活動における連携＞

大山蒜山地域においては、山、里山、海が一体となった景観や、極相林から牧草地まで、多様な自然環境を体感することができます。それぞれの関係自治体等が役割を持つことで、訪問者に周遊を促進することが可能です。

大山蒜山地域においては、大山や蒜山での登山、トレッキング、サイクリングやスノーシューなどのアクティビティだけでなく、夜間の星空観賞や、大山寺エリア周辺及び榊水高原エリアからの日本海や夜景を望むなど、訪問者は地域を周遊しながら、地域ごとの様々な方法で自然を楽しむことができます。

また、そのような豊かな自然環境の背景にある、地域の人々の営みの歴史や自然保護活動について学ぶことで、地域ならではの魅力をより深く体感することができます。奥大山自然塾（江府町）や、民間事業者による大山山麓をフィールドとしたサマーキャンプの実施、蒜山エリアにおける山焼き、茅刈りなどのボランティア活動や農畜産業の体験を伴う教育プログラム、三徳山での山護運動など、自然保護の歴史や環境教育的な文脈から自然に関わることができるプログラムも提供されているため、アクティビティ体験だけでなく、その裏側にある地域の方々の保全活動などを学びながら周遊することで、大山蒜山地域の方々が自然環境を大切に守ってきたことを肌で体感することができます。



自然体験(スノーシュー)



自然保全活動(山焼き)



環境教育(奥大山自然塾)

＜歴史・文化体験における連携＞

大山、三徳山や船上山などでは山岳信仰の歴史文化を体感できますが、大山寺地区においては大山、大山寺・大神山神社やお堂・お地蔵などと自然の風致の一体感とストーリー、三徳山においては三佛寺奥院（投入堂）での急峻な地形と独特の意匠及び構造を持つ建築とが織りなす独特の景観や「白狼伝説」による天与の恵みである三朝温泉のストーリーを合わせて感じることができ、船上山では後醍醐天皇にまつわる歴史が肌で感じられるなど、それぞれの地域ごとに体験できる価値が異なるため、大山蒜山地域全体として自然と一体になった歴史文化体験が可能です。



大山の歴史を刻むお地蔵



三佛寺奥院（投入堂）



後醍醐天皇の歴史が残る船上山

＜食体験における連携＞

大山蒜山地域においては、豊かな自然環境や、山々が作り出す水や土は動植物の生命を育み、さらには里山や海にまでその恵みをもたらしています。地域で採れる肉や魚（大山どり、鳥取和牛、とっとり琴浦グランサーモン）、乳製品、お米、野菜や果樹（白菜、大根、キャベツ、スイカなど）などの食材が大山の天然地下水や火山灰土（黒ボク土）による土壌で育っており、これらの食材を、その裏側にあるストーリーも知った上で食べながら地域を周遊することで、大山蒜山地域全体としての食文化を体感することができます。



豊かな自然の中で育つ動物



大山の地下水で育つお米



黒ボク土で育つ野菜

＜人材の連携＞

大山蒜山地域においては、地域のストーリーを伝えるガイド人材が不足している現状があります。そこで、例えば大山の山岳ガイドが蒜山や三徳山でも活動をするなど、それぞれの地域のガイド人材が連携することで、地域全体や地域ごとのストーリーを来訪客がより深く感じられるようになります。

資料編

(1) 関連計画の概要

(1)-1. 大山隠岐国立公園ステップアッププログラム 2025(令和3年2月策定)

平成28年3月、政府は、成長戦略と地方創生の柱として、観光を我が国の基幹産業へと成長させるべく、「明日の日本を支える観光ビジョン」を取りまとめました。環境省では、同ビジョンに基づき、日本の国立公園を世界水準の旅行の目的地とし、ブランド化を図る「国立公園満喫プロジェクト」を平成28年度から推進しています。

大山隠岐国立公園は、他の7国立公園とともに、同プロジェクトの取組を先行的、集中的に実施する国立公園として選定され、これを受けて同年9月に、関係行政機関や地域関係者で構成される「大山隠岐国立公園満喫プロジェクト地域協議会」が設立されました。地域協議会では、同年12月に、本プログラムの前身となる「大山隠岐国立公園ステップアッププログラム2020」を、平成28年度から令和2年度までの5年間を計画期間とし、具体的な取組方針を掲げるロードマップとして作成しました。

以降、同プログラムに基づき、多様な主体により、200を超える実に多角的な取組が行われてきた結果、大山隠岐国立公園を軸とした観光地域づくりが進められ、またターゲットとしていた訪日外国人旅行者も着実に増加しつつありました。また、目標としていた程度よりも緩やかな増加に留まっていることや、これまでの成果や課題を踏まえて取組を発展的に持続させる必要があったことから、令和2年2月の地域協議会において、令和3年度以降も大山隠岐国立公園満喫プロジェクトを継続することが合意されました。その後、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大を受けて、観光分野は未曾有の影響を被ることになりました。

本プログラムは、こうした時勢の中、令和2年度に地域協議会及びその下位機関である地域部会での複数回の協議を経て作成されたものです。引き続き大山隠岐国立公園独自の魅力を高めるとともに、前身のプログラムとは異なり訪日外国人旅行者だけではなく国内旅行者もターゲットに定めた上で、国内外からの利用者を回復させることを目指している。本プログラムは、こうした目標の達成に向けて大山隠岐国立公園満喫プロジェクトに携わる全ての人にとっての、令和3年度から令和7年度までの5年間の取組の指針であり、かつ、具体的な行動計画です。



大山隠岐国立公園ステップアッププログラム2025 概要

ブランディング・テーマ

神話と山岳信仰が息づく
暮らしとともにある 山・島・海



目標

- I. 自然と文化を活かした上質な観光を提供し、**大山隠岐国立公園ならではの魅力を極める。**
(指標：満足度、消費額、滞在日数など)
- II. 新型コロナウイルス感染症による**影響前の水準まで国内外からの利用者数を回復させる。**
(指標：日本人・外国人延べ宿泊者数など)

ターゲット層

【国内】近畿地方、中国地方、首都圏の在住者
【海外】台湾、香港、中国、欧米豪諸国の在住者

取組の方針

重点取組の例

(1) 自然と調和した「持続可能な観光」の実現

- ・ 大山で入山協力の金の実証実験を実施
- ・ 隠岐各島でE-bikeやキャンプ等がセットになったツアーを開発・販売
- ・ 島根県内の地域で希少種等の保全活動の体験ツアー化を検討

大山山頂



(2) 感動を与える体験の提供

- ・ 夕方～早朝の時間帯を含む、自然・文化体験ツアーの充実化と磨き上げ
- ・ ロングトレイル・サイクリングルートなど周遊ルートの充実化
- ・ ガイドの育成

大平山



(3) 多様な利用・需要に応じたサービスの提供

- ・ ワークेशन向けのツアーの造成、受入環境整備
- ・ 訪日外国人向けの中国 5 県の観光・交通バスの機能充実化



(4) 安全安心の確保と利便性と景観の向上

- ・ 大山登山口に自動翻訳機能付き総合案内所を整備
- ・ 大山寺と日御碕でまちなみ景観改善
- ・ 景勝地、登山道、ロングトレイルにある案内看板・誘導標識などを改修

(5) 戦略的な誘客・プロモーションの実施

- ・ 動画サイトを含むSNS、ウェブサイトでの魅力の発信、来訪動機の醸成
- ・ OTAや商談会などを活用して、体験ツアーや周遊ルートをPR



図 大山隠岐国立公園ステップアッププログラム 2025 概要

(1)-2. 大山隠岐国立公園大山蒜山地域ビジョン(平成 27 年 11 月策定)

大山隠岐国立公園「大山蒜山地域」は、中国地方最高峰の大山や蒜山三座を中心とした山岳地形と、その山麓に広がる西日本最大のブナの天然林や草原で構成され、豊かな生態系及び生物多様性ととともに、我が国を代表する傑出した自然景観を有する国立公園です。また、「伯耆三嶺」と称され、修験道の聖地である大山、船上山、三徳山は、古くから山岳信仰が盛んであり、多くの人々に利用されてきた歴史ある地域です。

しかし、近年、生活様式の変化に伴う草原の縮小、盗掘による希少種の減少、セイタカアワダチソウなどの外来植物の繁茂、ニホンジカ・イノシシの生息数の増加など、同地域の貴重な自然環境を構成する生態系及び生物多様性の劣化又はその恐れが懸念されています。また、利用のニーズや利用形態の変化に伴い、同地域を訪れる利用者の数は減少傾向にあります。

生態系及び生物多様性の劣化は地域の魅力を低下させ、さらなる利用の減少を招きます。そして、利用の減少は、自然環境の保全に対するインセンティブをも低下させ、さらなる劣化を招きます。

このような負の連鎖が進まないよう早期に正の連鎖の構築を図り、本地域の優れた自然と歴史・文化をより良い形で将来に継承していかなければなりません。そのためには、同地域で活動が続けている国、県、市町村、NPO、民間企業及び地域の関係団体などの多様な主体が、地域の将来像としてのビジョンを共有するとともに、ビジョンの実現に向けて関係者が協働した取組を進め、さらなる魅力向上を進めていく必要があります。

以上を背景として、平成 27 年 2 月、当該地域の多様な主体が参画する「大山隠岐国立公園大山蒜山地域連絡協議会」が設立されました。本ビジョンは、同協議会において、大山を取り囲むように位置する大山蒜山地域の特色ある5つの地域の個性をさらに磨きあげ、それらの取組や実施主体の連携を図ることで、地域と地域、人と人を積極的につなげていくことを目的として策定したものです。



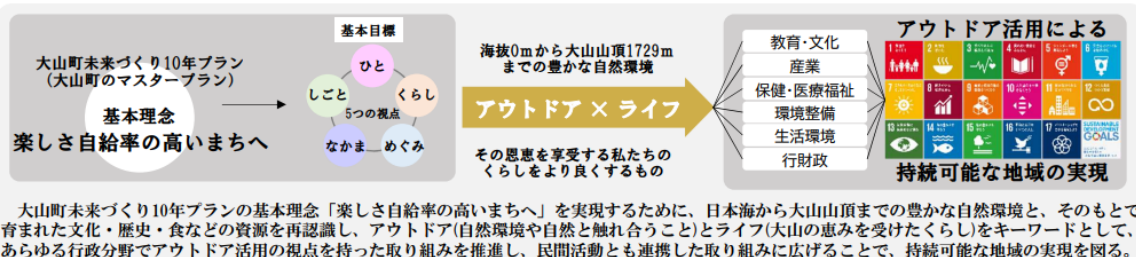
図 大山蒜山地域ビジョン(概要版)

(1)-3. 大山町アウトドアライフ構想(令和4年5月)

大山町では、令和4年に、アウトドア環境の整備・活用による持続可能な地域の実現をめざして、大山町アウトドアライフ構想を策定しました。

大山町未来づくり10年プラン(第二次大山町総合計画)の基本理念「楽しさ自給率の高いまちへ」を実現するために、日本海から大山山頂までの豊かな自然環境と、そのもとで育まれた文化・歴史・食などの資源を再認識し、アウトドア(自然環境や自然と触れ合うこと)とライフ(大山の恵みを受けた暮らし)をキーワードとして、あらゆる行政分野でアウトドア活用の視点を持った取組を推進し、民間活動とも連携した取組に広げることで、持続可能な地域の実現を図ります。

大山町アウトドアライフ構想のめざすもの



アウトドア環境の整備・活用による持続可能な地域の実現

環境×アウトドア	地域経済×アウトドア	社会生活×アウトドア
- 自然環境の保護と活用による資源の循環 - エコな移動手段などによる脱炭素化 - 自然との触れ合いを通じた学びの獲得	- 地域産品の域内消費による販路確保 - 交流人口の増加による消費額増加 - アドベンチャーツーリズムの商品化	- 健康年齢の延伸、災害への備え - 地域課題の解決につながるビジネス創出 - クオリティ・オブ・ライフの向上

アウトドア基盤整備

サービス・価値提案

観てよし、居てよし、住んでよし

- 町の環境・経済・社会などの地域課題の解決に向けて、豊かな自然環境を活用したアウトドア基盤を整備し、自然からの学びやさまざまなまちの資源が循環する大山の恵みとの共生が図られるライフスタイルを構築。
- 町のいろいろな取り組みに豊かなアウトドア要素を掛け合わせ、新たな価値の創造と地域の課題解決を同時に達成し、「観てよし」、「居てよし」、「住んでよし」となる持続可能(サステナブル)な地域の実現をめざす。

大山の恵みと共生する持続可能な「アウトドアのまち大山町」

観てよし (短期滞在)
観光・消費などの短期的な交流人口増加
ここにしかない楽しみ方提案

住んでよし (住民)
アウトドアを基盤とした町内資源の循環・有効活用による持続可能で住みよいまち
郷土愛を感じるふるさとの創生

居てよし (中・長期滞在)
ワーケーション・お試し移住等の中長期的な交流人口増加
ここにしかない魅力的な共生スタイルの提案

観光
・自然・文化歴史・食の体験を複合的に提供するアドベンチャーツーリズムの推進
・大山観光に関する情報発信力の強化

住んでよし (住民)
・自然・文化歴史・食の体験を複合的に提供するアドベンチャーツーリズムの推進
・大山観光に関する情報発信力の強化

居てよし (中・長期滞在)
・自転車などの人による移動手段による脱炭素化
・生物多様性、環境保全

サービス・価値提案
・豊かな自然を活用した健康づくり
・自然を感じてリラックス

ナチュラル
・自然との触れ合いから楽しく学ぶ
・自然との共生による防災力
・自然との共生によるクオリティ・オブ・ライフの向上

自然環境
・森林・里地里山の荒廃抑制
・一次産業の担い手確保

商工
・町内産品・商品の高付加価値化
・アウトドア利用者に優しいサービス提供

大山の恵みとの共生が図られ 資源が循環するライフスタイル 『アウトドアのまち大山町』

自然環境の保護と活用

アウトドアへの関心と親しみ

拠点施設整備・有効活用

土台となるアウトドア基盤整備

[illegible]

65

(1)-4. 真庭市蒜山地域振興計画(令和2年3月)

平成27年に策定した『第2次真庭市総合計画』は、「まち」にある先人から引き継いだたくさんの「価値」、すなわち人や文化、歴史、風土、習慣、もの、自然、環境などを活かしながら、真庭市に暮らす「ひと」が誇りをもち、互いを尊重しながら暮らしていく「真庭ライフスタイル」(多彩な真庭の豊かな生活)の実現を目標としています。そして、この具体的な施策として、観光については「農畜産物や景観、文化、伝統などの地域資源を組み合わせた新しい観光の取組を支援し、『回る経済』の中の産業として強化」とされています。

これを受け、平成29年に策定した『真庭市観光戦略』においては、地域づくりの主体を真庭市民ととらえ、豊かさを自ら生み出して幸せに暮らす真庭市民の「日常」＝旅行者にとっての「異日常」を提供する「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりを観光振興の柱として設定しました。さらに、一般社団法人真庭観光局が創設された平成30年4月に策定した『真庭市観光戦略アクションプラン』では、観光地域づくりを実践していくため、観光案内所の運営・整備と観光案内コンシェルジュの設置、滞在交流プログラムの企画・実施と滞在プログラム・ツアーの販売、二次交通の整備などのアクションプランを掲げています。本真庭市蒜山地域振興計画は、蒜山地域の観光入込客数が減少する中、隈研吾氏の設計による CLT 建築物という、蒜山地域及び真庭市における観光・文化の質を向上させる起爆剤となる建築物が移築されることを契機として、これらの従前の計画との整合性を取りつつ、蒜山地域における「観光地域づくり」のビジョンと、概ね10年先を見越して、この5年程度に実施する施策の計画を取りまとめたものです。

(1) コンセプト

■「SDGs ツーリズム・蒜山」

世界的に関心が高まる SDGs を背景に、「SDGs ツーリズム・蒜山」をコンセプトとし、蒜山における観光・体験・教育を通じて、SDGs への関心を高めるとともに、蒜山及び真庭の魅力の本質である、豊かな自然や文化、歴史への関心・共感を深めてもらうことを目標とする。また、環境と観光が調和した観光地域づくりを進めることで、先人から受け継いできた蒜山地域の自然、文化、景観を次世代に引き継ぎ、人と自然が共生する「地域共生社会」の実現を目指すものとする。

(2) ターゲット・スタイルの考え方

■「滞在型観光」の推進

観光スタイルの潮流を踏まえ、個人客を重視するとともに、従来の主要顧客であった関西圏及び中国地方からのファミリー層に加え、安定的な集客に結びつけるため関西圏及び中国地方からの若者及びシニア層、さらには近年増加傾向にある訪日外国人にターゲットを広げる。

また、蒜山の観光の特性を踏まえ、蒜山全体を楽しんでもらう「滞在型観光」をキーワードに、食や高原的景観や体験型観光を充実させ、SDGs や自然共生、蒜山の魅力の本質への関心・共感を深めてもらうことができるターゲットに向けてのアプローチを進める。

スタイル	ターゲット（例）
『滞在型観光』	ファミリー +若者、シニア、外国人 +障がい者、ペット連れ、文化人、教育旅行など

(3) 方針

本計画は、蒜山への観光入込客数が減少している中、CLT 建築物の移築を契機として観光入込客の回復を図るとともに、観光の質向上のための施設やサービスの充実を図ることにより、これまで蒜山を訪れていなかった顧客層を獲得することが目的である。そして、この効果を湯原温泉や勝山の歴史的町並みを含めた真庭市全体に波及させることも大きな目的である。

3章で示した、蒜山の観光の課題に対応するためには、従来の自家用車や観光バスでの通過型観光だけでなく、ゆっくりと滞在して、蒜山ならではの食や文化、自然、そして蒜山に暮らす人々との交流を楽しめる「滞在型観光」が重要である。この考え方は、平成30年に創設した真庭観光局が目的としている「観光地域づくり」と合致するものである。

そのためには、CLT建築物を蒜山観光に訪れる来訪者のゲートウェイとして位置付けるとともに、CLT建築物を拠点として蒜山の様々なスポットに回遊させる仕組みが必要である。そして、そのような滞在型観光を実現させるためには、各スポットに魅力ある観光コンテンツや充実した体験メニューがあり、交通手段が確保できることなどが必要である。また、これらの取組の実現にあたっては、蒜山地域の住民の主体的な取組が重要となる。

以上を踏まえ、本計画では（１）CLT建築物による観光拠点整備、（２）回遊ルートの形成、（３）滞在型観光メニューの充実と体制整備、（４）アクセスの改善と地域間連携の推進の四つを取組の方針とする。

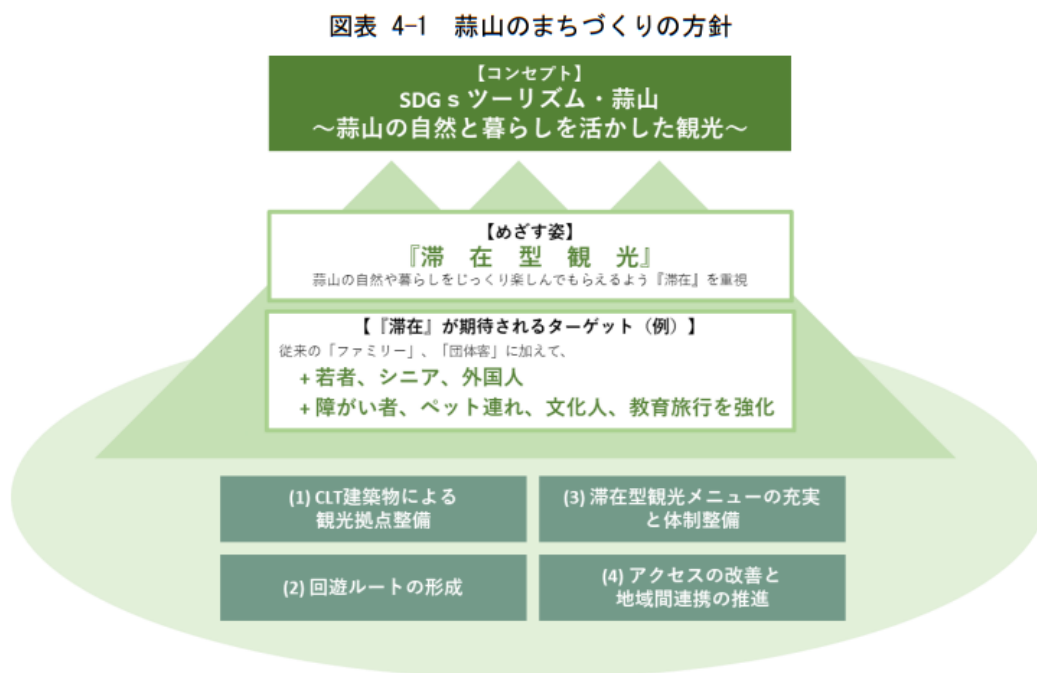


図 真庭市蒜山地域振興計画 4章. 目指す方向性

(1)-5. 大山寺地区上質化推進基本計画(令和2年2月)

鳥取県西伯郡大山町は、鳥取県西部の中心都市である米子市から東に約15km、中国地方の最高峰大山の北西側の裾野に広がり、北側は日本海に面し、南部には日本百名山である大山(標高1,729m)があります。大山寺地区は、大山山麓の標高700～800mの大山隠岐国立公園内に位置し、霊峰大山から麓の田園風景、日本海までを一望でき、単なる山岳リゾートの枠に留まらず、海・里山・山という自然の大きな循環を実感できるロケーションにあります。周囲はブナを中心とする広大な落葉樹林に囲まれ、修験道の地であった霊峰大山を背景に成立した大山寺の門前町です。大山寺地区周辺のかつての大山寺の境内地一帯は、国史跡大山寺旧境内として指定されています。また、「地藏信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市」として日本遺産の認定を受けています。

このように、大山寺地区は、自然と歴史が混ざり合う稀有な景観、資源を有しているため、「鳥取県景観計画」において「景観形成重点区域」に指定されています。加えて、本地区が含まれる大山隠岐国立公園は、環境省が進める「国立公園満喫プロジェクト」のモデル公園に選定され、訪日外国人観光客を中心とした受け入れ体制強化の取組が進められています。

本計画においては、大山寺地区周辺で過去に策定された計画の見直しと整理を進めるとともに、現状の課題の洗い出しを行い、来訪者が増加しているインバウンドやアウトドア利用者、障がい者や高齢者に対応するバリアフリーを含めたユニバーサルデザイン等、近年多様化する来訪者のニーズに対応した大山寺地区のサービス設備等の再整備と大山の魅力を向上させる施策に関する方針を策定します。



図 大山寺地区上質化推進基本計画の概要(イメージ)

(2) 基本構想策定の経緯

令和 5 年度以降、地域関係者へのヒアリングや地域でのワークショップ等による意見聴取等を通じて、地域との意見交換を中心として検討を行ってきました。

また、基本構想の策定にあたっては、基本構想の内容自体や、拠点として選定をされた大山寺地区を中心とした、地域の課題を解決し、国立公園ならではの感動体験につながるような滞在体験の魅力向上のためのアイデアや提案について、外部民間事業者から広く意見聴取(サウディング調査)を実施しました。

地域関係者との意見交換や地域内外からのアイデア等をもとに整理した基本構想(案)は、令和 7 年 3 月に実施をした「第 2 回大山寺地区協議会」での承認等を踏まえ、「大山隠岐国立公園大山蒜山地域 利用の高付加価値化に向けた基本構想」として策定したものです。

表 基本構想策定の経緯

時期		会議名等	実施内容
令和 5 年度	令和 5 年 12 月	地域内外の関係者(行政機関)へのヒアリング調査	基本構想(案)の検討の目的の説明と、各機関の既存の取組や計画との整合に關してのヒアリングを実施。
	令和 6 年 2 月	事業者・関係団体ヒアリング	本事業に關する民間団体・事業者へのヒアリング調査を実施し、先端モデル事業の概要や目的、大山隠岐国立公園大山蒜山地域の選定に係る視点等を説明した上で、基本構想(案)への意見の取り入れや地域の推進枠組み、持続可能な観光の実現に向けた課題等のヒアリングを実施。
	令和 6 年 2 月～3 月	民間提案公募	基本構想(案)に關して、民間事業者から広く意見・提案を求め、知見の基本構想(案)への取り入れを実施。
	令和 6 年 3 月	基本構想(素案)に係る関係者との意見交換	基本構想(案)の検討にあたり、関係者との意見交換を行うための会議を実施。
	令和 6 年 3 月	満喫プロジェクト地域協議会における報告・意見聴取	先端モデル事業の概要と実施状況、ならびに基本構想(案)の内容について、令和 5 年度大山隠岐国立公園満喫プロジェクト地域協議会での報告と出席者からの意見聴取を実施。

時期		会議名等	実施内容
令和6年度	令和6年 5月	地域の推進枠組みの主体となりうる関係者へのヒアリング調査	大山蒜山地域における推進枠組みの主体となりうる関係者（行政機関、民間事業者、地域団体）に対して、地域の強みや抱えている課題等を中心にヒアリングを実施。
	令和6年 6月	地域の推進枠組みの主体となりうる関係者間での会議	ヒアリングを通じて得た内容（地域の強みや抱えている課題）を整理し、大山蒜山地域における推進枠組みの主体となりうる関係者（行政機関、民間事業者、地域団体）に対して提示し、内容について合意の上、「地域の目指すべき方向性」や「その実現に向けた拠点」等について意見交換を実施。 ⇒ 地域の強みや抱えている課題について、基本構想(案) <u>2 大山隠岐国立公園大山蒜山地域の現状整理</u> の項目に反映。
	令和6年 8月	地域の推進枠組みの主体となりうる関係者間での会議	ヒアリング調査や関係者間会議で得た内容（「地域の目指すべき方向性」や「その実現に向けた拠点」等について）を、大山蒜山地域における推進枠組みの主体となりうる関係者（行政機関、民間事業者、地域団体）に対して提示し、内容について合意を行った。 ⇒ 「地域の目指すべき方向性」や「その実現に向けた拠点」等について、基本構想(案) <u>3 大山隠岐国立公園の高付加価値化の方向性（1）大山蒜山地域のストーリー、（2）感動体験の方向性</u> の項目に反映。
	令和6年 9月	専門家委員会（非公開）	令和6年8月開催の「地域の推進枠組みの主体となりうる関係者間での会議」で合意した内容を元に、9月に専門家委員会に諮り、10月に大山蒜山地域において大山寺地区を拠点に選定。
	令和6年 10月	第1回 大山寺地区協議会	令和6年10月に大山寺地区が拠点に選定されたことを受け、大山寺地区協議会を設立し、拠点選定理由や今後の進め方等を共有し合意。

令和6年度	令和6年 10月	地域の推進枠組みの主体となりうる関係者間での会議	令和6年10月開催の第1回 大山寺地区協議会での合意を受け、地域における推進枠組みの主体となりうる関係者間で、「地域の目指すべき方向性」や「その実現に向けた拠点」について具体的な協議を行い、合意。 ⇒ 基本構想(案)3 <u>大山隠岐国立公園の高付加価値化の方向性</u> (5) <u>利用拠点である大山寺地区の拠点整備の目標像</u>の項目に反映。
	令和6年 12月	地域の推進枠組みの主体となりうる関係者間での会議	令和6年10月開催の地域の推進枠組みの主体となりうる関係者間での会議での合意を受け、改めて「地域の目指すべき方向性」や「その実現に向けた拠点」をベースに、「来訪者に何を伝えていきたいか」を協議。 ⇒ 基本構想(案)3 <u>大山隠岐国立公園の高付加価値化の方向性</u> (3)<u>大山蒜山地域版インタープリテーション全体計画の方向性</u>の項目に反映。
	令和7年 1月	地域の推進枠組みの主体となりうる関係者や大山蒜山地域関係自治体へのヒアリング調査	地域の推進枠組みの主体となりうる関係者や、大山蒜山地域関係自治体に対して基本構想(案)の素案の説明を行い、内容に関するヒアリングを実施。
	令和7年 1月	大山蒜山地域関係自治体との意見交換会	大山蒜山地域関係自治体との意見交換会を開催し、ヒアリング結果の共有とディスカッションを行った。 ⇒ 地域の強みについて、基本構想(案) 2 <u>大山隠岐国立公園大山蒜山地域の現状整理</u>の項目に反映。
	令和7年 2月	民間事業者との対話(サウンディング調査)	民間事業者との対話(サウンディング調査)を実施し、主に下記2点に関して、広くご意見をいただいた。 ①基本構想案の内容に関するご意見・ご提案 ②その他、大山蒜山地域における事業上の課題、アイデアに関するご意見・ご提案

令和 6 年 度	令和7年 3月	第2回 大山寺地区協議会	大山寺地区協議会において基本構想(案)に関する説明を行い、承認。
	令和7年 3月	大山蒜山地域関係自治体との会議	大山蒜山地域関係自治体に対して基本構想(案)に関する説明を行い、承認。
	令和7年 3月	満喫プロジェクト地域協議会における報告	大山隠岐国立公園満喫プロジェクト地域協議会において基本構想を説明、報告。

(3) 民間事業者との対話（サウンディング調査）

令和 7 年 2 月に民間事業者との対話（サウンディング調査）を実施しました。下記に実施内容を記載します。

1. 趣旨

環境省では、インバウンド需要が急速に回復する中、“国立公園の美しい自然の中での感動体験を柱とした滞在型・高付加価値観光”を推進することとし、国立公園の利用の高付加価値化の方向性と、国立公園ならではの感動体験を提供する宿泊施設を中心とした利用拠点の面的な魅力向上に取り組む先端モデル事業の進め方を検討し、令和5年6月に『宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上に向けた取組方針』（以下「取組方針」といいます。）を公表しました。取組方針に基づき、令和5年8月に『国立公園における滞在体験の魅力向上のための先端モデル事業』の対象として、大山隠岐国立公園（大山蒜山地域）を含む4つの国立公園を選定し、魅力向上に向けた基本構想の検討を進めてきました。

その中で、大山隠岐国立公園（大山蒜山地域）においては、令和6年 10 月に「大山寺地区」が利用拠点として選定され、本日、「大山隠岐国立公園大山蒜山地域 利用の高付加価値化に向けた基本構想」（以下、「基本構想」という。）を策定しました。

その際、基本構想の検討段階において、基本構想に基づく取組について、民間資金等を活用した官民連携のもとに実施するため、民間事業者の皆様から広く意見・提案を求め、対話を通じて実効性・実現性のある取組スキーム等を構築することを目的として、事業者対話を実施しましたので、その結果概要について公表します。

2. 調査概要

(1) 実施スケジュール

公示（実施要領の公表）：令和7年1月 10 日（金）

サウンディング事前説明会：令和7年1月 20 日（月）

サウンディングの実施：令和7年2月3日（月）～2月7日（金）

(2) 参加事業者

主な業種 ※業種は「日本標準産業分類」の大分類に基づき整理

○宿泊業 ○生活関連サービス業 ○技術サービス業 ○金融業 等 計 10 社

(3) サウンディングの項目

①基本構想案の内容に関するご意見・ご提案

②その他、大山蒜山地域における事業上の課題、アイデアに関するご意見・ご提案

3. 実施結果

実施結果については、第 4 章（4）利用拠点である大山寺地区の拠点整備の目標像、第 5 章（2）大山蒜山地域における今後の展開の可能性及び（3）今後の展開に向けたロードマップの項目に反映しています。